サンディ・ピーターセンの

クトゥルフモンスターガイド

モンスター・ウォッチングのための超自然生物ハンドブック

S. PETERSEN'S FIELD GUIDE TO

CTHULHU MONSTERS

A Field Observer's Handbook of Preternatural Entities

The 27 Most Frequently Encountered Monsters

SANDY PETERSEN
TOM SULLIVAN
LYNN WILLIS
with
PETER DANNSEYS
E.C. FALLWORTH
L.N. ISINWYLL
IVAN MUSTOLL
Translation: TEIKO NAKAYAMA

"... They found living things [that] worshipped onyx and basalt images of Tsathogghua. But they were not toads like Tsathogghua himself. Far worse — they were amorphous lumps of viscous black slime that took temporary shape for various purposes. The explorers of K'n-Yan did not pause for detailed observations, and ... sealed the passage."

— H.P. Lovecraft.

S.PETERSEN'S FIELD GUIDE TO

CTHULHU MONSTERS

A Field Observer's Handbook of Preternatural Entities

The 27 Most Frequently Encountered Monsters

AZATHOTH
BYAKHEE
CHTHONIAN
SPAWN OF CTHULHU
DARK YOUNG
DEEP ONE
DHOLE
DIMENSIONAL SHAMBLER
ELDER THING
FLYING POLYP
FORMLESS SPAWN
FUNGI FROM YUGGOTH
GHAST
GHOUL
GREAT RACE
HOUND OF TINDALOS
HUNTING HORROR
ITHAQUA
MOON-BEAST
NIGHTGAUNT
NYARLATHOTEP
SERVITOR
SHANTAK
SHOGGOTH
SHUB-NIGGURATH
STAR VAMPIRE
YOG-SOTHOTH

Cover Design:KAZUO HIROI

サンディ・ピーターセンの

クトゥルフモンスターガイド

モンスター・ウォッチングのための超自然生物ハンドブック

S.PETERSEN'S FIELD GUIDE TO

CTHULHU MONSTERS

A Field Observer's Handbook of Preternatural Entities

The 27 Most Frequently Encountered Monsters

SANDY PETERSEN
TOM SULLIVAN
LYNN WILLIS
with
PETER DANNSEYS
E.C. FALLWORTH
L.N. ISINWYLL
IVAN MUSTOLL
Translation: TEIKO NAKAYAMA

"... They found living things [that] worshipped onyx and basalt images of Tsathogghua. But they were not toads like Tsathogghua himself. Far worse — they were amorphous lumps of viscous black slime that took temporary shape for various purposes. The explorers of K'n-Yan did not pause for detailed observations, and ... sealed the passage."

— H.P. Lovecraft.

ピーターセンの
クトゥルフ・モンスター・ガイド

モンスター・ウォッチングのための超自然生物ハンドブック

Howard Phillips Lovecraft
1890 - 1937

PETERSEN'S

Field Guide To Cthulhu Monsters

ピーターセンのクトゥルフ・モンスター・ガイド
モンスター・ウォッチングのための超自然生物ハンドブック

サンディ・ピーターセン
コンセプトと本文解説
トム・サリヴァン
イラストレーション
リン・ウィリス
企画・追加解説・編集・レイアウト・製作
中山てい子
日本語翻訳

Chaosium Inc.
1988

ロバート・ブロックに、
お返しにこの悪夢を贈る

イントロダクション

今日では、超自然生物に関する研究というものにも、十分な敬意が払われています。しかし、かつては、超自然生物などを研究していれば、世間から非難され、迫害されたものでした。何世代にもわたって、「形而上学」は真実でもないものを真実らしくこじつけようとしているということで、非難されてきました。パイオニアたちは、恐ろしい身の危険にさらされていました。研究の対象である生き物からの危険ばかりでなく、同時代の人間たちによる危険にもさらされていたのです。

本書は超自然生物に関する情報を、なるべくわかりやすい方法で世間に伝えるためのガイドブックです。関係者一同は、これらの奇妙な生物に関する知識が、もっと広まることを願っています。そうすれば、この分野の研究に対するもっと広い支持が得られるようになると思うからです。そういう支持が緊急に必要になっているのです。

本書に収録したのは、我々地球の人類に最も関係のある怪物27種です。

本書は、2ページごとに項目(怪物名)が変わり、各項目はまったく同じ構成になっています。すなわち、その怪物の描写、生息地、分布、生活と習慣、その怪物を本書に載っている他の怪物と区別するためのヒントが述べられています。また欄外には、背丈を示す図と、その生物に関する注目すべきポイントが図入りで示されています。

各モンスターの姿は、写真ではなく、正確なイラストによって示しました。超自然生物はうまく写真に写らない場合が多いし、まったく写真には写らない種属もあるからです。

質問形式になっている"識別ガイド"は、1つのモンスターを他のモンスターと区別するのが簡便にできるように作られたものです。また、本書の最後の方には、取り上げた27種のモンスターのサイズの比較図がついています。その中には、本書を作ったスタッフ3人も入っています。1番最後には、参考文献のリストと、推薦する本のリストが載っています。

超自然のモンスター・ウォッチングはたのしい仕事でした。また、大きな収穫もありました。しかし、アマチュアの超自然主義者は、ウォッチングを開始する前に、適切な注意を怠らないようにしてください。

どんなことがウォッチングの妨げになるのかは明らかでしょう。博物館とか動物園には、超自然生物はいませんから、そんな所へ行っても怪物に遭遇するチャンスはありません。実は、超自然生物の物理的な証拠を見つけるのは、至難のわざ、むしろ不可能なのです。

普通の自然主義者は、獲物の目をくらませるためのオトリを工夫したり、小動物の通り道をたどったり、水の穴の近くに潜んでいたり、ビデオ・カメラを設置したり、目指す生物の臭跡を犬に追わせたりすることができます。しかし、超自然主義者はそういう方法を取るわけには行きません。超自然主義者の関心は、地球外に向いている場合もあるし、場合によっては宇宙外に向いている場合もあるからです。また、形而上学的な観察というものは、学者とか、訓練を受けた専門家にしかできないことです。うまく観察するためには、非常に我慢強くなくてはならないし、その怪物が過去に地球上に現れたときのことに関して、すべての知識、しかも正しい知識を持っていなければなりません。

しかしながら、はじめて目ざす超自然生物に遭遇したときのスリルは、他のものと比べることなんかできないくらい大きいものです。ルイジアナの薄暗い沼地をかき分けて進んで行く"黒い仔山羊"をはじめて見たときの興奮を想像してください。

読者諸君に申し上げたいことは、H.P. ラヴクラフトの作品の中の素晴らしい記述のことを忘れないで欲しいと言うことです。彼の作品からは、まだまだインスピレーションを受ける余地がたくさんあります。冒険ゲームである"クトゥルフの呼び声"の中に、本書で取り上げたモンスターのことが出てくるし、これ以外にももう少し珍しいタイプのモンスターも出てきます。実際の探索は、ゲームとして創造した空想上の冒険よりも危険だし、時間のかかる忍耐のいる仕事かも知れません。しかし、雰囲気は同じです。

では、せいぜい頑張ってください！

ミスカトニック大学、中世形而上学科
エメリタス・エリファス・コードヴィップ・フォールワース教授

START HERE

1．目に見えない怪物ですか？

●はい　――２番へ行ってください。
●いいえ――３番へ行ってください。

2．そいつの出す音は・・・

●風を送るような、口笛のような音ですか？――盲目のものです。26～27ページを見てください。
●クスクス笑うような音ですか？――星の精です。58～59ページを見てください。

3．形がありますか？

●はい　――４番へ行ってください。
●いいえ――22番へ行ってください。
●色々な形をとることがあります――ニャルラトテップです。48～49ページを見てください。

注：ニャルラトテップはいろいろな形をとる怪物なので、当“識別ガイド”でも、色々な場所に当てはまってしまうかも知れません。この怪物は、地球上では、目に見えない形として出現したことはありませんから、目に見えない形というのはないのかも知れません。ニャルラトテップであるということは、外観からではなくて、性質や振る舞いから知るしかありません。ニャルラトテップは、普通、自分がニャルラトテップであると簡単に認めます。だから、ニャルラトテップと話すことができれば、それがニャルラトテップであることを知るのに問題はありません。

4．イモムシのような形をしていますか？

●はい　――５番へ行ってください。
●いいえ――７番へ行ってください。

7．頭がありますか？

●はい　――10番へ行ってください。
●いいえ――８番へ行ってください。

8．体がたくさんの球体の集まりのようになっていますか？

●はい　――ヨグ＝ソトースです。60～61ページを見てください。
●いいえ――９番へ行ってください。

10．翼がありますか？

●はい　――11番へ行ってください。
●いいえ――15番へ行ってください。

11．それのサイズは...

●象くらいもあるか、あるいはそれ以上ありますか？―― 29番へ行ってください。
●人間とだいたい同じくらいですか？――12番へ行ってください。

15．それの胴体は...

●円錐形で、足のない怪物ですか？――イスの偉大なる種族です。36～37ページを見てください。
●円錐形ではなく、普通は足がありますか？――16番へ行ってください。

16．そのサイズは...

●巨大で、背の高さが６メートル以上ありますか？――イタクァです。42～43ページを見てください。
●普通のサイズですか？――17番へ行ってください。

29．その存在は頭を持っていますか...

●触手の付いた、タコのような頭を持ち、かぎ爪と細い翼を持っていますか？――クトゥルフの落とし子です。14～15ページを見てください。
●馬のような頭で、大きな翼を持ち、触手がない怪物ですか――シャンタク鳥です。52～53ページを見てください。

17．それは...

●顔に触肢があって、自由に形の変わる体、つまり塑型性の高い体をしていますか？――ムーン＝ビーストです。44～45ページを見てください。
●触肢はなく、決まった形もなく、何もないところからいきなり現れたりしますか？――18番へ行ってください。

13．それは...

●ツノがあって、黒い皮膚の色をしていますか？――夜のゴーントです。46～47ページを見てください。
●ピンクがかった色をした、甲殻類のような外殻をもっていますか？――ユゴスよりのものです。30～31ページを見てください。

18．２本足で立っていますか？

●はい　――19番へ行ってください。
●いいえ。普通は煙のようなものとして現れ、それがだんだん形をなして行きますか？――ティンダロスの猟犬です。38～39番へ行ってください。

19．後ろ足は...

●異常発達していて、ピョンピョン跳ぶようにできていますか？――ガストです。32～33ページを見てください。
●別に異常発達はしていません。――20番へ行ってください。

20．その皮は...

●シワが寄っていて、袋のようにふくらんでいますか？――空鬼です。22～23番へ行ってください。
●袋のようにはなっていないし、大きくヒダになっている部分もありません。――21番へ行ってください。

22．その体は…

●よく部分的に見えなくなってしまい、また、常に笛を吹くような音を出していて、強い風と関係がありますか？——盲目のものです。26～27ページを見てください。

●常に目に見えていて、風とは関係のない怪物です。—— 23番へ行ってください。

23．その怪物は…

●頭、腕、足など基本的な要素は持っているが、かなり自在に伸び縮みしますか。——24番へ行ってください。

●ちゃんとした手足はなく、ほとんど形がないと言ってもいいですか。——25番へ行ってください。

24．その怪物は…

●どことなくタコに似た頭とコウモリのような翼を持ち、巨大なサイズですか？——クトゥルフの落し子です。14～15ページを見てください。

●カエルのような形で、翼のない怪物ですか？——ムーン＝ビーストです。44～45ページを見てください。

25．その怪物の色は…

●黒い色ではあるが燐光は発しておらず、流動体ですか？——ツァトゥグァの無形の落し子です。28～29ページを見てください。

●もしかしたら流動体かも知れないが、色は黒くはない。あるいは、黒い場合であっても、燐光を発していますか？——26番へ行ってください。

5．翼がありますか？

●はい　——忌まわしき狩人です。40～41ページを見てください。

●いいえ——6番へ行ってください。

26．はっきり口とわかる部分がありますか？

●はい　——27番へ行ってください。

●いいえ——28番へ行ってください。

6．あきらかに触肢とわかるものがついていますか？

●はい　——クトーニアンです。12～13ページを見てください。

●いいえ——ドールです。20～21ページを見てください。

27．そのサイズは…

●巨大で、雲のような形ですか？——シュブ＝ニグラスです。56～57ページを見てください。

●普通のサイズで、触肢があるか、あるいはカエルのような形をしていますか？——外なる神々の従者です。50～51ページを見てください。

9．それは…

●足にヒヅメのようなものがついており、4本の巨大な触肢と無数の小さな触肢がついていますか？——黒い仔山羊です。16～17ページを見てください。

●足に猛鳥のようなかぎ爪がついており、小さな触肢がたくさんあって、その先が口になっていますか？——星の精です。58～59ページを見てください。

28．それは…

●絶え間なく目や小さい触肢やその他の器官を形成し続け、移動するときは転がりますか？——ショゴスです。54～55ページを見てください。

●目は持っておらず、移動の方法は成長することによって移動できるだけですか？——アザトースです。8～9ページを見てください。

12．目がありますか？

●いいえ——13番へ行ってください。

●はい　——14番へ行ってください。

14．それは…

●規則的な放射状になっていて、茎のようなものの先に目がついていますか？

——古のものです。24～25ページを見てください。

●左右対称で、目のための茎を持っていない怪物ですか？

——ビヤーキーです。10～11ページを見てください。

21．その皮は…

●緑色っぽい色をして、湿っぽくて、水かきのある手の平をしていて、海に住んでいる怪物ですか？——深きものです。18～19ページを見てください。

●うす汚くて、カビのようなもので覆われていて、半分に分かれたヒヅメがついていて、犬に似た顔をしていますか？——食屍鬼です。34～35ページを見てください。

識別ガイド

使い方：1番の質問からスタートして、指示に従って進んでください。質問に答える際には、自分で満足できる答えを選んでください。質問を飛ばすようにという指示があった場合には、その質問は飛ばしてください。太文字で書かれている生き物の名前が、君のモンスターです。名前の後に書かれているページ名は、本書でそのモンスターの解説のあるページです。この“識別ガイド”の中では、サイズや形を1度以上質問する場合もあります。

背丈の比較図
（単位はフィート）

アザトース

“原始時代のわれらの祖先にしてみれば、未知なるものは、予知できぬものと同じく、恩恵と災厄をもたらす恐ろしくも全能なる神にも似た存在であり、謎めいていて全くこの地上のものとは思えず、したがって、明らかに人間の与り知れぬ世界のものということになった。”

― H.P. ラヴクラフト

『文学と超自然的恐怖』（定本ラヴクラフト全集第７-Ｉ巻より：植松靖夫　訳）

Azathoth

煮立ち、核を持った混沌、アザトースは時間というものが始まったときから、ずっと存在しています。理論学者の中には、アザトースが我々の宇宙を創始したのだと言う人もいます。この怪物は盲目であり、また精神というものがありません。しかし、巨大なパワーを持っています。そのパワーは多分無限大かも知れません。

超次元幾何学をよく学んだ者か、形而上学をよく学んだ者であれば、アザトースを地球上に呼び寄せることができます。普通この怪物は、変化し続けるリズミカルな塊として現れます。そして従者の出す細い笛の音のような音に合わせて、体をよじらせます。

アザトースは危険な存在です。常にこの怪物を追い払う努力をしなければなりません。いきなり現れて、幾何級数的に成長し、実に広い範囲の地域を破壊することができるからです。アザトースの出現は、半径数百メートルぐらいの場合もあるし、半径数キロメートルに及ぶ場合もあります。今までに知られているかぎりでは、この怪物は最後に追い払われたときにも、まだ成長し続けていたということです（ビリングトン、Billington, 1945年）。右のページにあるイラストは、成長し始めてから２分ぐらいたったときのアザトースの姿を描写したものです。

ある有力な学説（モリアーティ、Moriarty, 1872年；ダンシーズ、Dannseys, 1983年）によれば、火星と木星の間にベルト状にある小惑星は、アザトースがその軌道内にあった惑星を１つ粉々に砕いたためにできたのだと言うことです。そのような破壊的なパワーを持つ怪物ですから、アザトースと接触することは絶対に避けるべきだと、強く忠告しておきます。

生息地：通常の時空を超えた、宇宙の中心部。
分布：アザトースは宇宙の中心部以外のところにはいません。それ以外に現れるのは、召喚された場所だけです。
生活と習慣：玉座にいて、悪魔の笛の細い単調な調べに合わせて、絶え間なく身をくねらせています。他の巨大な怪物たちがそのまわりでゆっくりと身をくねらせて踊りを踊っています。このように絶えず体の形をゆがめていることには、もしかしたら何か宇宙的な意味があるのかも知れません。

アザトースの見分け方――
◆　盲目のものは常に移動していますが、アザトースは１つの場所にしかいません。
◆　ツァトゥグァの無形の落とし子はアザトースよりも小さく、またいつも黒い色をしています。
◆　外なる神の従者はアザトースよりもずっと小さくて、笛を吹いています。普通、従者の中の少なくとも１匹がアザトースと一緒にいます。
◆　ショゴスは音楽と共にはいません。また、小型の怪物と一緒にいることもありません。
◆　シュブ＝ニグラスはひどい悪臭をはなち、また、はっきりした口を持っています。アザトースの体には、はっきりとした特徴的な部分はありません。

成長率

下の図は７つの成長段階を経た後のアザトースの体の直径を示したものです。各段階につき３～10秒ずつの時間がかかります。

3000メートル

図１．成長の初期段階

AZATHOTH

背丈の比較図

ビヤーキー

“飼いならし、調教した有翼の雑種生物の群れが打ちそろって一斉にどさどさと跳びだしてきた………鳥でもなく、もぐらでも禿鷹でもなく、蟻とも吸血コウモリとも腐乱死体ともつかぬなにか――私には思い出せない、否、思い出してはならぬなにかだった。”

— H.P. ラヴクラフト

『祝祭』(定本ラヴクラフト全集第2巻より：並木二郎　訳)

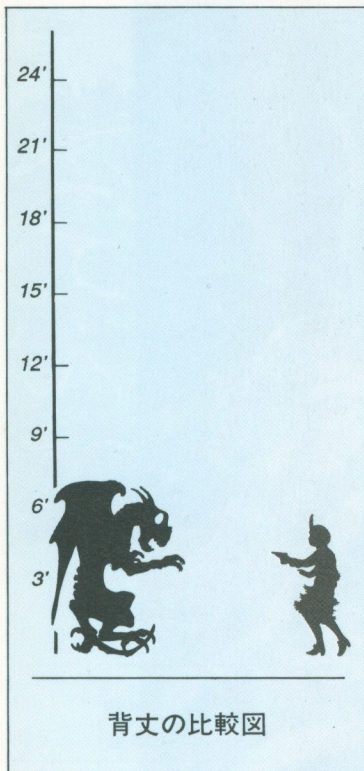
Byakhee

ビヤーキーは星間の生き物ですが、その体を形成している物質は普通の物質です。ビヤーキーの体は2つの部分、つまり、胸部と腰部から成っています。胸部からは、2つの翼と2本の足が出ており、また頭がついています。あと2本の器用な足は、腰部の前の方から出ています。腰部の大きな部分を占めているのは、フーンと呼ばれるユニークな常磁性の器官です。

ビヤーキーはうるさい音を立てる活動的な怪物です。休んでいるときでも、飛んでいるときでも、金切り声のようなキーキーした音や、しゃがれ声のようなガーガーした音を立てています。静かなのは、獲物に向かってそっと忍び寄るときだけです。足はずいぶんしっかりした足なのに、ビヤーキーはほとんど歩くことをしません。どこにでも飛んでいきます。

生息地：空気のない小惑星や彗星の核に住むのが好きです。ビヤーキーが大気圏に入ってくるのは、惑星にいる生物を食べるためだけです。
分布：たぶん、アルデバラン星の近くが原産地なのですが、ビヤーキーはアルデバラン星から数百光年も離れたところでも見かけられます。地球にもやって来ますが、地球には住んではいません。
生活と習慣：ビヤーキーは1匹でいることもあるし、小さいグループとして見かけることもあります。どうやって繁殖するのかは、わかっていません。ビヤーキーが通常エサにしているのは、我々の太陽系にはいない星間の生物ですが、地球上の生物をもしょっちゅうむさぼり食います。
興味ある事実：フーンがどんな器官であるのかは、異生物学者にもよくわかっていません。磁力束によって送られてくる銀河系の磁場の波長と、フーンの波長を合わせてあるのかもしれません。惑星の上では、このフーンによってビヤーキーは飛び回ることができるのです。翼は動きと方向転換のために使われているのに違いありません。宇宙ではフーンが動きのために使われ、限られた機動のためにも使われています。

地球上では、ビヤーキーは時速70キロメートルで飛ぶことができます。このスピードは空気の圧力が下がれば、もっと速くなります。宇宙では、光の速さの10分の1まで出すことができます。星間の真空状態の中では、ビヤーキーのフーンは時空のパターンを発生させることができます。そのパターンは古代の本の著者たちが「カイム」と呼んでいたものです。カイムの中では、ビヤーキーは光の400倍までの速さで飛ぶことができます。カイムを発生させることは大仕事ですから、星間旅行のためにだけ使います。旅行が終ってビヤーキーが出現するときは、飽くことを知らないほど腹をすかしています。我々はビヤーキーを避けるべきです。地球で遭遇するビヤーキーはほとんどの場合、カイムによって到着したのです。

ビヤーキーの見分け方――
◆　ユゴスよりのものは色がピンクがかっていて、よく動く肢を6本もっています。また、大気の中を不器用に飛びます。ビヤーキーはそれとは異なり、軽快で敏捷に飛びます。
◆　夜のゴーントは色が黒く、声を持っていません。また、顔がないし、尻尾がついています。
◆　シャンタク鳥はビヤーキーよりもずっと大きいです。

その他の謎

生物学的には、ビヤーキーと蜂とは何の関係もありませんが、ビヤーキーの体にフーンがついている位置は、地球にいる蜂の体に針がついている位置と同じです。もしかしたら、フーンは最初は攻撃の機能を持っていたのかも知れません。ビヤーキーに関する詳しいデータがトリア(Treer, 1984年)の書いた本に載っています。

図2．ビヤーキーの横断面図

BYAKHEE

背丈の比較図

クトーニアン

“……未知の生命体が棲息する隠れた測り知れない世界のことを考えればぞっとして身震いの一つもでるものであろう。なにしろそんな世界は、星々彼方のはざまで脈動しているのかもしれないし、あるいは死者と狂人にしか垣間見ることのできぬ不浄な次元から我が地球に重くのしかかってきているのかもしれないのだから。”

— H.P. ラヴクラフト

『文学と超自然的恐怖』(定本ラヴクラフト全集第7-I巻より：植松靖夫　訳)

Chthonian

穴に住む巨大な怪物クトーニアンの胴体は、円筒型をしています。後部の方が次第に細くなっていて、前部は触手のかたまりです。クトーニアンには目がありません。地表から何キロも下の穴の中で一生を過ごします。地震とか火山の噴火などによって、クトーニアンが地上に出てきてしまった場合には、一緒に詠唱のような声が聞こえます。

クトーニアンは地球の地殻を動かすことができますが、どうやってやるのかはわかっていません。何匹も一緒に力を合わせて、大規模な地震を引き起こすのです。地震の規模は彼らの数によります。成虫のクトーニアン30匹で、1906年のサンフランシスコ地震と同じ規模の地震を引き起こすことができます。

クトーニアンは大量の水というものが苦手です。しかし、高温には耐えることができます。成虫のクトーニアンは溶けた溶岩の中でも、楽しげにのたくりまわっています。

クトーニアンは強い精神能力を持っていて、遠くはなれた人間の行動を探知すること、その行動に影響を与えたり、コントロールしたりすることができます。クトーニアンが人間と関係をもつことはめったにありません。関係をもつとしたら、邪魔者として、あるいは、エサとしてだけです。

この敵意ある怪物は、人間の文明が社会として繁栄することを許しているようです。と言うのも、彼らはあまりにも数が少ないため、彼らが人間を滅ぼすことができる前に、人間の方でそれに対抗する方法を見つけてしまうだろうと考えられるからです。あるいは、クトーニアンは人間の巣(すなわち都市)というものを歓迎しているのかも知れません。と言うのは、彼らは大規模な孵化を待っているからで、そのときの幼虫の群れのために、大量のエサが必要だからです。

生息地：地下約10キロメートルのところ。クトーニアンは地球のマントルの内側でさえ泳ぐことができます。たぶん、地球の核にまで行ったりしているようです。

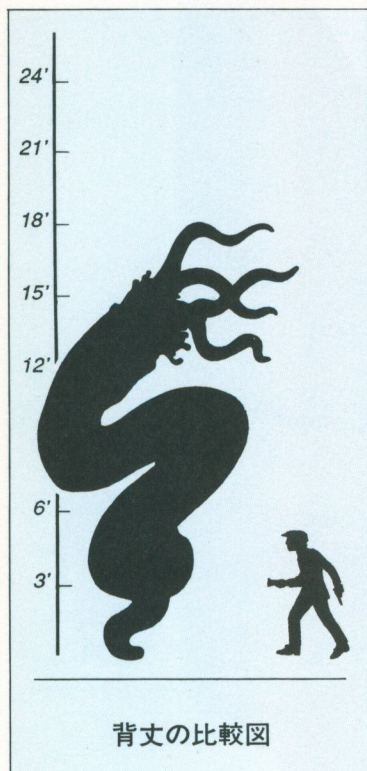
分布：地球上のいたるところ。しかも、クトーニアンの原産地が地球外であることを考えると、他の惑星上にも住んでいると思われます。

生活と習慣：この複雑な体の構造をもつ怪物は、成虫になるまでに数千年もかかります。生まれてから成虫になるまでに、５段階の成長過程があります。クトーニアンの幼虫は熱に対して敏感なので、地表に近いところにいなければなりません。幼虫は、その成長のために液体の有機物(たとえば血液)を必要としています。ですから、触肢を使って不運な犠牲者の体から、体液を吸い取ります。成熟したクトーニアンは、そのような液体養分をあまり必要としません。と言うのは、地球の核と地層との間の温度差の中を行き来することによって、代謝エネルギーを得ることができるからです。クトーニアンは幼虫のためにエサを集めること、幼虫を訓練すること、幼虫を外敵から守ることに夢中です。ですから、幼虫を傷つけたり、とったりしないでください。親虫はたいへん怒って攻撃的になり、復讐をしようとします。

クトーニアンの見分け方——

◆　クトゥルフの落し子は触肢のほかに、手足がついているものが多く、タコに似た感じがします。手足のないイモムシ風ではありません。

◆　ドールはずっと大きいし、触肢がありません。

◆　従者はずっと小さくて、目があるし、いつもフルートのような笛の音と共にいます。

クトーニアンの幼虫

孵化したばかりのこの幼虫は、すぐに血液を必要とするようになります。このようなクトーニアンの幼虫は、傷つきやすくて弱いものです。成長した後の頑丈で強いクトーニアンとは対称的です。幼虫が出てこようとしている厚い金属性の殻に注目してください。慣れない者は、まるで岩のようなこの卵を、地質学的な物質だと間違えがちです。

図3、卵からかえる幼虫

CHTHONIAN

背丈の比較図

クトゥルフの落し子

“あらゆる事象と力と宇宙の秩序のすさまじい矛盾を語る言葉などありえようはずもない。山が歩き、否、のし歩いたのだ。緑のべとつく星々の落し子が、おのれの権利を取りもどすために目覚めたのだ。星々がふたたび正しい位置を得たのである。”

— H.P. ラヴクラフト

『クスルウーの喚び声』(定本ラヴクラフト全集第３巻より：矢野浩三郎　訳)

Spawn Of Cthulhu

クトゥルフは何千万年も前に地球にやってきた生き物たちの中で、１番よく知られている怪物です。その落し子は、ゼラチンめいた緑色をしていて、その姿には２つの異なる種類があります。１つは巨大なタコに似た怪物で、もう１つはドラゴンのような翼とかぎ爪をもっていて、顔がヒゲで覆われている太った怪物です。クトゥルフ自身は、後者の姿をしています。

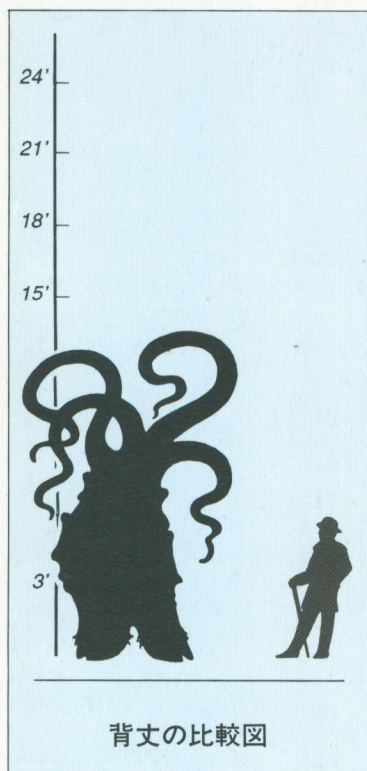
クトゥルフの落し子の体は、自由に形を変えることのできる性質をもっています。非常に急激に、しかも大幅に体の形を変えることができるのです。手足、その他の体の各部分は、元の形を残してはいるのですが、その形をゆがめたり、縮めたり、ふくらませたりして、形を変えるのです。

生息地：クトゥルフとその眷族たちは、水の中でも平気で生きていけます。そのため、今まで彼らは海の怪物であると考えられてきましたが、それは正しくありません。彼らは元来、陸に住む生き物なのです。大きなパワーを持つ怪物ですから、好きなように宇宙空間を旅行することができます。そして１つの世界から他の世界へ自由に出入りすることができます。

分布：彼らには、活動の時期と活動休止の時期の周期があるようですが、その宇宙的な周期がどういうものであるのかは、わかっていません。現在のところは、彼らの種族のほとんど全員が活動を休止しています。現在の周期が終って、ふたたび活動を開始する時期になるまで、死んだように眠っているのです。しかし彼らが目を覚ます時期が近づいているという証拠があります。

生活と習慣：眠っている間は、精神的な活動だけを行ないます。たとえば、夢を送ったり、テレパシーによる命令を送ったりするのです。活動の時期が始まれば、クトゥルフとその種族たちは、いにしえの昔に持っていた彼らの文明をふたたび築き上げるつもりのようです。この種族は、以前、南太平洋の大部分を占めていたある巨大な都市に住んでいたらしいのです。ルルイエという名のその都市は、そこに住んでいたクトゥルフ種族と共に、今では深さ１万メートルもある海の底の、さらに何百メートルもある泥と石の下に沈んでいます。彼らがどうやって繁殖するのかは、よくわかっていません。有糸分裂によって、繁殖するのかも知れません。もしこの憶測が当たっているすると、ルルイエに住む無数のクトゥルフの落し子たちは、すべてクトゥルフ自身から直接派生したものであることになります。

クトゥルフの眷族の見分け方——

◆　クトーニアンには翼がないし、手足もありません。
◆　黒い仔山羊はもっと小さいし、はっきりと頭だと言える部分を持っていません。
◆　盲目のものはもっと小さいし、口笛のような音がするし、一時的に見えなくなったりします。
◆　イタクァには触肢がなく、極寒の天候に耐えられ、翼がないのに空を飛びます。
◆　外なる神の従者はもっとずっと小さくて、翼がないし、普通は転がって移動します。

飛行

飛行のためには、落し子は体の力の大部分を翼に集中させなければなりません。

図４．落し子の広げた翼と体の大きさの割合

背丈の比較図

黒い仔山羊

“西洋の恐怖伝説の力は確かに多くの場合、夜行性の不気味な宗派がひそかに存在しているらしいとする疑念から生じたものである。その宗派の奇妙な風習——ずんぐりとした蒙古人らが羊と牛の群を率いてヨーロッパを漂白していた、まだアーリア人が現われない農耕以前の時代の遺産だが——は遙か太古の昔のきわめて不愉快な豊饒神崇拝の儀式に源を発している。”

— H.P. ラヴクラフト

『文学と超自然的恐怖』(定本ラヴクラフト全集第7-I巻より：植松靖夫　訳)

Dark Young

シュブ＝ニグラスの別名(称号)はたくさんありますが、その中の1つに、千匹の仔をはらみし森の黒山羊というのがあります。ここで言われている“仔”というのがすなわち、この黒い仔山羊のことなのです。

まるで樹木のような形をしていますが、2つに割れたヒヅメのようなものがついている数本の頑丈な足が、その体を支えています。体には大きな胃袋が口を開けていて、そこからベタつく粘液が垂れ落ちています。体の上部には、さまざまなサイズの触肢がからみ合っています。その中の4本が特に大きくて、木の幹くらいの太さがあります。

生息地：黒い仔山羊に遭遇する場所は、だいたい草や樹木が生い茂っているような場所、たとえば、森とか湿地帯などです。体の形から言っても、身を隠すのにそういう場所が1番都合がよいからでしょう。黒い仔山羊についての研究調査はほとんどなされていませんが、ある簡単な調査(イジンウィル、Isinwyll, 1986年)の報告によれば、黒い仔山羊は地球上の気候の温和な地帯や、亜熱帯地方で1番よく見かけられるということです。

分布：世界中に分布しています。特に、シュブ＝ニグラスへの信仰が行なわれているところにいます。黒い仔山羊たちは異界で生まれたものと考えられます。それも1つの決まった世界からではなく、地球外のいくつかの別の世界から来たのがいるようです。地球生まれであると確認された例はありません。したがって、この怪物はそんなに長い間地球に滞在はしません。1回につき、長くてもせいぜい2、3年しか滞在しません。

生活と習慣：知性のある怪物なのですが、普通は1匹だけでいるところしか、見かけられたことはありません。エサとするのは、黒い仔山羊の強力な触肢の範囲内をウロウロしていた、不運な生き物の体液や内臓などです。イジンウィルの報告(1987年)によれば、普通、黒い仔山羊はエサを狙うときには、じっと動かずに待ちかまえています。そして、エサを摂取し終ると、すばやく別の場所に移動して、また同じことを繰り返します。しかし黒い仔山羊が獲物の足跡を追ったり、後を追いかけたりした例もいくつかあります。多分、極端に腹をすかせていたか、何かに強制されていたのでしょう。

黒い仔山羊は地球上では繁殖をしません。どういう方法で繁殖するのかは、まったくわかっていません。多分、すべてシュブ＝ニグラスから生まれるので、自身の繁殖能力は必要ないのかも知れません。しかし、黒い仔山羊が人類の先史時代の「多産祈願」の儀式に関係していたという記録(イジンウィル、Isinwyll, 1981年)が出てきたため、彼らに繁殖能力がないなどということはありえないようにも思われます。黒い仔山羊の神話的なパワーは、森と木とのために貢献してきました。彼らは“生命の木”とか“歩きし木”などという言葉によって象徴されています。

黒い仔山羊の見分け方——

◆　クトーニアンには足がありません。
◆　クトゥルフの落し子はもっと大きく、頭がついています。
◆　シュブ＝ニグラスはもっと大きく、これほどはっきりした形はもっていません。

足の関節

平均的な黒い仔山羊は、胴体と足だけで2メートルくらいあり、伸ばした触肢を入れると、全部で6～7.5メートルくらいです。しかし、この怪物にはサイズの限度というものはありません。20メートル以上もある個体が目撃されたこともあります。下に示した図に、その個体の体の一部が描かれています。怪物が前へ進むときに、足の関節が後ろへ引っ込むような形になることに注目してください。足が地に着くときには、体重を支えるために足が横へ広がります。

図5．黒い仔山羊の襲撃

DARK YOUNG

深きもの

“飛び跳ね方もはなはだ奇妙で、２本の脚で飛ぶこともあれば、よつんばいになって跳ねることもある。………目ばたきをせぬ目を持つ顔は表情というものを一切浮かべていなかったが、気味の悪いしゃがれ声がやつらの嫌らしい感情を伝えてあまりあった。”

— H.P. ラヴクラフト

『インスマウスの影』(定本ラヴクラフト全集第５巻より：片岡しのぶ　訳)

背丈の比較図

Deep One

深きものは海の中に住んでいる生き物で、どことなく魚と蛙の混血のような姿をしています。エラを持っていますが、空気を呼吸することもできて、陸の上でもいくらでも生きのびることができます。深きものの色は、普通は青味がかった緑色で、腹のところだけは白っぽい色をしています。陸上を歩くときは、４本の足を全部使うこともあるし、２本の後ろ足だけで歩くこともあります。泳ぐときには、ひれ足のようになった水かきのある足を使って泳ぎます。吐き気をもよおすような、魚くさい匂いを漂わせます。

深きものが深きもの以外の生き物と交配した場合には、その間にできた子供は、最初のうちは深きもの以外の方に似ています。しかし成長するにつれて、外見も体の内部も変形していって、深きもののようになって行きます。最後には「大変容」の日を迎え、陸に住んでいた場合には、海の中の社会でその後を生きるべく、海に帰って行きます。深きものは人間およびイルカとうまく交配したことが知られています。イルカとの混血児の方が、人間との混血児よりも変容の時間が長くかかるようです。多分、骨の形が全然違うからでしょう。

深きものの混血児が、すべて完全な変容をとげるとは限りません。わずかな環境の違いや、遺伝が大きく影響するようです。

深きものには、自然死というものがありません。長く生きれば生きるほど、体は大きくなって行きますから、非常に大きな深きものもいます。逆に、食物を取れない深きものは縮んでいきます。筋肉と骨の組織を新陳代謝で消耗させてしまうのです。飢餓の状態が長く続けば、蛙ほどのサイズにまでなってしまう場合もあります。そのような場合には、数週間にもわたって、大量のエサを摂取しなければ、普通のサイズに戻りません(デールレット、d'Erlette, 1959年)。

生息地：海の中。特に、気候の温和な地域か熱帯地域の深さが１キロメートル以下の大陸棚のあたりです。

分布：ほとんどの大陸の海岸に沿った海すべてです。深きものは明らかに地球生まれですが、その進化の過程はわかっていません。

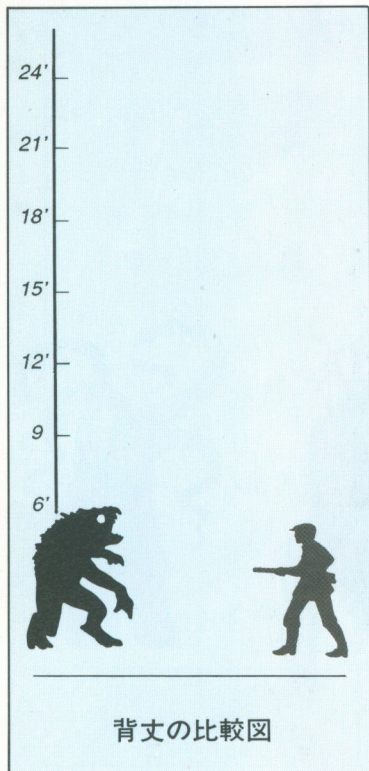
生活と習慣：肉食性で、水の中に住む脊椎動物である深きものは、知性があり文明も持っていると言われています。海中の都市に住み、魚の群れを集め、選ばれた地域の人間を、洗練されたやり方で手なずけます。染色体に異常なほどの柔軟性があるため、異なる種族との間に雑種を作ることができ、異種交配は普通に行なわれています。

深きものの見分け方——

◆　空鬼は体のプロポーションがかなり違います。手がもっとずっと長くて、皮膚はだらしなく伸びてシワが寄っています。

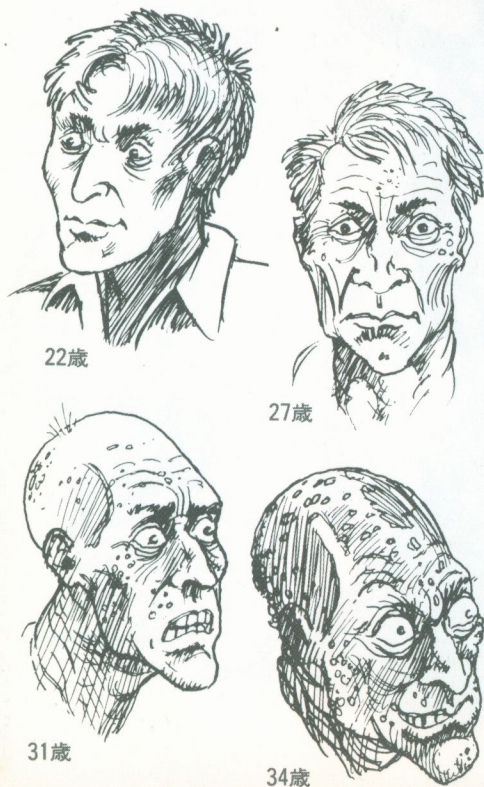
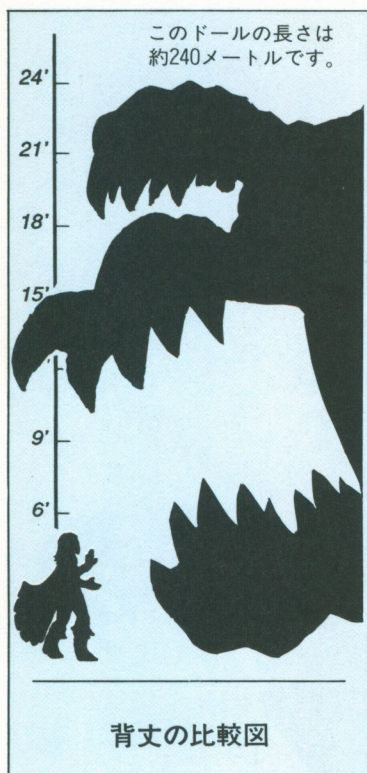
◆　ガストは飛び跳ねるようにして移動し、４本足を全部使うことはありません。

◆　食屍鬼(グール)はカビと古い土のような匂いを発します。

◆　特に大きい深きものはイタクァにちょっと似ています。しかし、イタクァは常に凍てつく寒さと共にいるし、水かきやエラを持っていません。

インスマス面(づら)

深きものの遺伝子が混じっているために、年とともに変形が進んで行くさまを示しています。34歳のこの男は、もう“大変容”の日が近くなっています。皮膚は皮がむけてきているし、耳は吸収されてしまっています。もうすぐ、鼻が欠け落ちることでしょう。

図６．変形の４段階

DEEP ONE

ドール

“真の恐怖小説には秘密の殺人、血まみれの骸骨、例によって経帷子をまとって鎖をひきづり歩く屍体といった陳腐なお膳立てを超える何かがそなわっていなくてはならない。つまり息もつかせぬある種の雰囲気とか外部からやってくる未知の力に対する曰く言い難い恐怖感がそなわっていなくてはならないし、また、その小説の主題にふさわしい真剣なものものしい調子で、人間の頭脳が抱く考えの中で最も戦慄すべきもの——混沌の襲撃や底知れぬ宇宙の魔神から、唯一我々を守ってくれる確固たる自然の法則を、悪意をもって一時停止させたり破棄したりすること——が暗示的に描かれていなくてはならないのである。

— H.P. ラヴクラフト

『文学と超自然的恐怖』(定本ラヴクラフト全集第7-I巻より：植松靖夫　訳)

Dhole

ドールは巨大なイモムシのような形をしていて、どこかの遠い世界にいる怪物です。光を嫌って、穴の中に住んでいるので、見かけることはめったにありません。ドールは口から有毒な酸を含んだ粘液を噴出させることができます。

ドールの１番大きな特徴は、サイズが巨大であると言うことです。普通のドールで、長さが少なくとも180メートル、直径は６メートルはあります。長さ300メートル、直径15メートルのドールも珍しくありません。この怪物はミミズと同じようなやり方で、体を伸ばしたり縮めたりすることはできますが、クトゥルフの落し子やムーン・ビーストのようなやり方で体の形を変えることはありません。

生息地：地中の深いところ。ドールは地層の内部を穴だらけにして崩してしまったのでもないかぎり、地上に出てくることは決してありません。ドールがあらゆる方向にトンネルを掘ったために穴だらけになった地層は、まるでスポンジのようになります。恐ろしい迷路です。

分布：地球上でドールが見かけられたことはありません。とは言っても、それは地球上にドールが１匹もいないということではありません。いくつかの違った惑星に住んでいる怪物ですから、星間を旅行するすべは知っているはずです。他の生き物によって、運ばれるのかも知れません。

生活と習慣：ドールはどん欲に何でも食ってしまう怪物です。新鮮なものであれ、腐ったものであれ、とにかくあらゆる種類の炭化水素をエサにします。たとえば、石炭、油、土くれ、死骸などです。サイズがあまりにも巨大であることと、トンネルを掘り続けることをやめないことから、ドールは生命体のいる惑星を荒廃させてしまいます。ですから地球上でドールに遭遇した場合には、すぐに関係当局に報告するべきです。

ドールの成長サイクルはあまり研究されていません。ある理論(マーシュ、Marsh,1980年)によれば、ドールと言うのは成長の最終段階にきたクトーニアンであるという推測もされています。もっとも、異生物学者の多くは、この理論に反対しています。それよりも多少は真実味のある仮説(ダンシーズ、Dannseys,1981年)によれば、ドールは通称‘ドリームランド’と呼ばれている存在界から来た怪物だと言うことです。この説によれば、ドリームランドにいるボール(Bhole)という巨大な怪物がドールを生んだのだと言うことです。ボールは、迷惑なことに、生んだドールを次元間の構造の隙間を通して、他の世界に落としたのだということです。これで知性のないドールが、いろいろな違った世界に存在していることの説明がつきます。

ドールの見分け方——

◆　クトーニアンには触肢があるし、サイズももっと小さいです。

ドールの口の部分

口の部分は普通は下の図(8a)のように、体の前部に収納されています。必要なときにはすばやく口の部分を伸ばして、図(8b)のようになります。

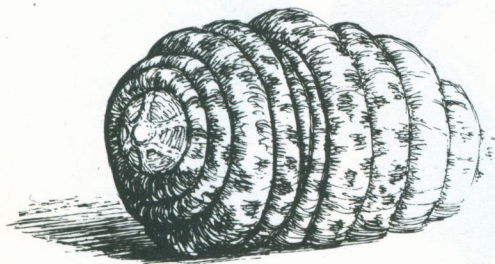



図８ａ．口を閉じたドール

図８ｂ．口を開けたドール

DHOLE

背丈の比較図

空鬼

“頭部の張りのない、死んだような眼とおぼしきものが、酔ったようにゆらゆらと揺れているのである。曲った爪のついた前肢をひろげ、まったく表情という次元を超えているにもかかわらず、体全体から激しい邪悪さを発散させている。”

— ラヴクラフト＆ヒールド
『博物館の恐怖』(ク・リトル・リトル神話集より：野村芳夫　訳)

Dimensional Shambler

シワだらけでクシャクシャの怪物である空鬼は、われわれの宇宙の外にある宇宙間の渦巻きの中に住んでいます。大きなかぎ爪を持ち、形のない顔、空っぽの目、ゆるんで垂れた皮膚をしています。ヨグ＝ソトースその他の怪物も、空鬼と同じ宇宙間の渦巻き世界に住んでいると言われていますが、空鬼ほどよく知られてはいません。空鬼がよく知られているのは、われわれの宇宙にしょっちゅう入り込んでくるからでしょう。

食肉性の怪物である空鬼が、どのようにして獲物を選ぶのかは、まったくわかっていません。ある仮説(ラーカン、Larkhan,1985年)によれば、ある状況下での人間の行動を決める3つの基本要素の働きによって起こる細胞質の働きから出るパターンによるのだとも言われています。しかし、空鬼に関することは、まだまだこれからの研究を待たねばなりません。

生息地：次元と次元の間です。エサを取るためとか、儀式のために、空鬼は絶え間なく次元と次元の間を行き来しています。用が終わると、時空の連続体の外へと戻っていきます。空鬼が棲んでいる宇宙空間がどんなところかという記録は存在しません。
分布：多次元に渡っています。空鬼はどこにでもいるし、またどこにもいないのです。空鬼の実際の数はわかっていません。召喚によって呼び出した場合のことを数に入れなければ、地球上で起こる空鬼がらみの出来事は1年に最高8500件からゼロ件まで渡っています(ウィルバム、Wilbham,1988年)。
生活と習慣：空鬼はいつも1人で行動するハンターで、4次元の世界や、それ以上の高次元の世界にも入っていける力が自然に備わっています。次元間を自由に通り抜けることで、エサを獲得し、敵から逃れ、また、非常にすばやい移動を行うことができるのです。

空鬼は次元と次元の間からちょっと現れて、小型の怪物などを狙うことなどは簡単にできます。獲物を捕らえるための空鬼の得意技は、閉ざされた場所(密室など)の中で実体化して、姿を現すことです。そうすれば、外部から見られることはないし、獲物は簡単に逃げ出すことができません。

空鬼の繁殖のしかた、寿命の長さ、社会生活などは、探索者が宇宙間のヴェールをつき抜ける何かの手段でも発見してくれないかぎり、わからないでしょう。

空鬼の見分け方——
◆　深きものは普通、なめらかな皮膚かウロコのある皮膚をしています。
◆　ガストはもっと活発だし、はっきり顔と言える部分を持っています。
◆　食屍鬼(グール)は人間と同じプロポーションをしていて、つま先立ちで元気よく走ります。
◆　ティンダロスの猟犬は最初は煙のかたまりとして現れますが、いったん形が出来上がると、空鬼とは全然違う形ですから容易に見分けられます。

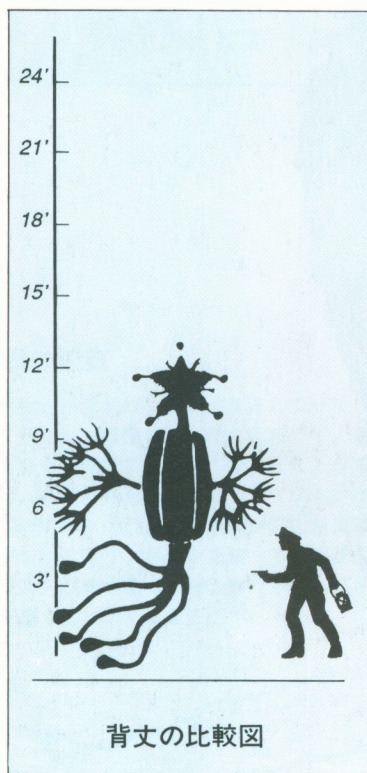
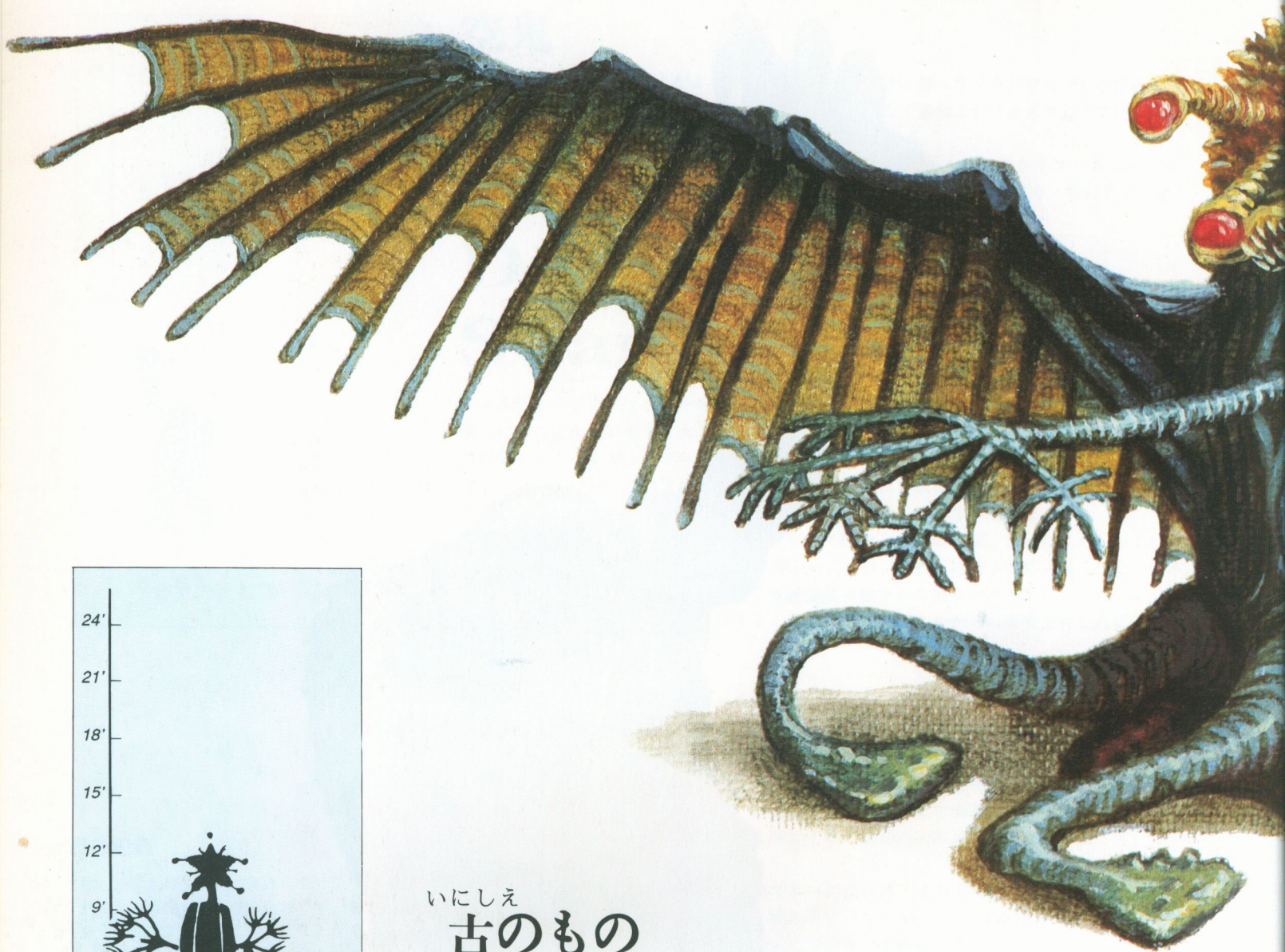
前肢の関節

両端の指は他の指とは逆向きについています。両方とも親指として使うためです。他の指も自分の意志で逆向きに曲げることができます。底部が特別に丈夫にできているソケット型の関節を180°回転させるのです。空鬼は何かをつかんだり、手先きを使って何かをする場合に、32種の違った手の形の中から好きな形を選ぶことができます。

第7図——空鬼の指の構造

DIMENSIONAL SHAMBLER

24'
21'
18'
15'
12'
9'
6
3'

背丈の比較図

古のもの

“彼らの肉体的強靱さは、ほとんど信じがたいほどのものだった。大洋最深部の恐るべき水圧の中でさえ、彼らの体は何1つ影響を受けぬかのようだった。事故で命を落とすもの以外は、ほとんど死ぬ者もなく、埋葬地域の数も限られていた。”

— H.P. ラヴクラフト
『狂気山脈』(定本ラヴクラフト全集第5巻より：高木国寿　訳)

Elder Thing

古のものはまたの名を古きもの(Old One)とも言い、ウミユリのような感じの、半植物の怪物です。星型の頭、樽を立てたような胴体、多様な触肢、5つの翼をもっています。翼は使わないときには、太い胴体の横についているヒダの中に引っ込めておきます。この怪物は放射状にシンメトリー形をしていることで知られています。

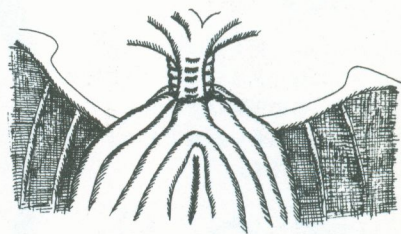
古のものの文明は、何百万年もの間地球上で栄えていました。その文明の最後の地上の砦は、南極大陸にありましたが、最後の氷河時代がやってきたとき、完全に海の底に沈んでしまったのでした。繁栄した文明を享受していたこの種族も、長い間にはだんだんと衰微してゆき、その知識も失われてゆきました。彼らの勢力範囲は、今では完全に海の中だけとなり、しかも深い大洋の底の方だけに限られています。

何十億年も前に地球に到着した彼らは、どんな温度変化や真空状態にも耐えられ、食物の摂取も呼吸も必要ないような化学変化による方法で、星間旅行に耐え得たのでした。地球上で、彼らは単純な有機体を創造して食物とし、またその有機体から奴隷として使うショゴスをも創造しました。それだけでなく、この地球上のすべての生命は、この古のものが冗談で作りだしたものか、あるいは失敗作なのです。

上の絵について

上の絵は古のものが、休息の体勢をとっているところです。首と茎を胴体の中に引っ込めています。

縦方向の調節

古のものは首あるいは茎、あるいはその両方を伸び縮みさせて、背丈を調節することができます。下の９ａ図では、首を伸ばしているので、エラの割れ目が見えています。また、首のすぐ下の胴体に翼をしまうポケットの口が見えていることにも注意してください。９ｂ図では、茎がはっきりと示されています。茎を伸ばしているということは、なにかに好奇心を抱いたか、興奮していることを示しています。また、攻撃の準備として茎を伸ばしていることもあります。攻撃に際しては、前ページのシルエットのように、首と茎の両方を伸ばします。

第９ａ図――首を伸ばしたところ

生息地：深い海の底。この怪物は大変広い範囲に生息しているので、どんな所で出会ったとしてもおかしくありません。
分布：大西洋のまん中にあるうねに沿ったところ。永劫の昔においては、古のものは南半球全体に見かけられました(後には南極大陸だけになりました)。知性のあるこの生き物は、もともとは他の世界から地球にやってきた生き物です。遠くの惑星には、彼らとごく近い種類の生き物が今でも繁栄していることが知られています。
生活と習慣：古のものの繁殖方法は、胞子による繁殖です。彼らは無機物から栄養を摂取することもできますが、有機体、とくに獣を食うことによって栄養を取った場合の方が、より活発に活動できるようです。古のものは特別に強靱な生き物で、どんな温度にも耐えられるし、陸上でも、海中でも、空中でも、猛スピードで移動することができます。
　不運だったスタークウェザー・ムーア探検隊によって、唯美的で知的だったこの種族のことが明るみに出たのでした。

古のものの見分け方――
◆　ユゴスよりのものは丸い頭をしていて、翼は２枚しかありません。しかも海の中にいることは絶対にありません。

第９ｂ図――茎を伸ばしたところ

背丈の比較図

盲目のもの

"この種族は物質の形をとっているのはほんの１部分でしかなく、[そして] 翼のような、目に見える飛行手段は何も持たないのに、空を飛ぶ能力があった……… ぞっとするほどの柔軟な体をしているとか、一時的に姿を見えなくすることができるのだとかいったあいまいなほのめかしがあった……… "

— H.P. ラヴクラフト
『超時間の影』(定本ラヴクラフト全集第６巻より：福岡洋一　訳)

Flying Polyp

盲目のものの特徴は、目に見えたり見えなくなったりが不規則に起こることと、形が自由に変わることでしょう。また、この怪物は常に口笛のような音を出しています。この音のために、この悪意に満ちた怪物が目に見えない状態のときでも、そのだいたいの位置を知ることができるのです。

盲目のものという種族は、元はと言えば、地球形成初期の生物をエサにするために、宇宙のかなたから地球に降りた生き物です。そして窓のない黒い玄武岩の塔のある都市を築きました。そのうちに、イスの偉大なる種族によって戦争をしかけられ、負けて、地下に押しやられることになったのでした。地下で盲目のものは強く成長し、数も増え、地下の環境に順応して、地上よりもむしろ地下の方を好むようになりました。ときどき、彼らは地上へと押し寄せてきますが、人類の時代においては、今までのところ活動はしていません。

偉大なる種族の未来調査によると、人類が絶滅した後で、盲目のものも絶滅することになっています。

生息地：古生代においては、盲目のものは地上に住んで繁栄していました。現在は地下の洞窟の中にしかいません。多分、地上の環境があまりにも変わってしまったため、地下の生活の方を好むようになったのかも知れません。

分布：世界中いたるところの地下の大洞窟の中。ただし、人間の知っている洞窟の中ではありません。と言うのは、たとえ人間が盲目のものの住んでいる洞窟を発見しても、不運なその人間が自分の発見を報告できるチャンスはほとんどないからです。盲目のものの故郷は地球以外のどこかの星です。今でもその星には仲間が住んでいるはずです。

生活と習慣：盲目のものは捕らえることのできる有機体なら何でも、捕まえて残酷に食ってしまいます。エサ取りのときと、戦いのときには、大風を利用します。実は盲目のものの存在は、この異常な風の動きによって知ることができます。異常な風というわけは、この風は吹きつけるのではなく吸い込むとか、風の通り道をふさいでいる物があっても、それによって妨げられるのではなく、その物のまわりに蛇のようにまといつくとか、いろいろ異常な動きをする風だからです。

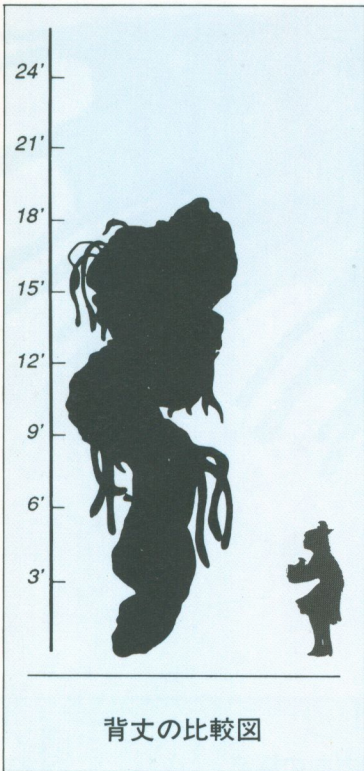
盲目のものの足跡は、丸い５つの指の跡です。他のどんな怪物の足跡とも違う非常に特徴のある跡なので、すぐにわかります。

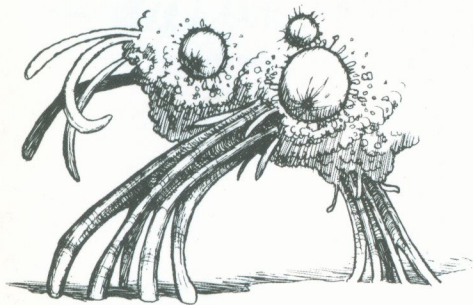
盲目のものの見分け方――

◆　盲目のものは見えたり見えなくなったりを絶え間なく繰り返すのが特徴です。このような特徴を持つ怪物は、他にはまずありません。

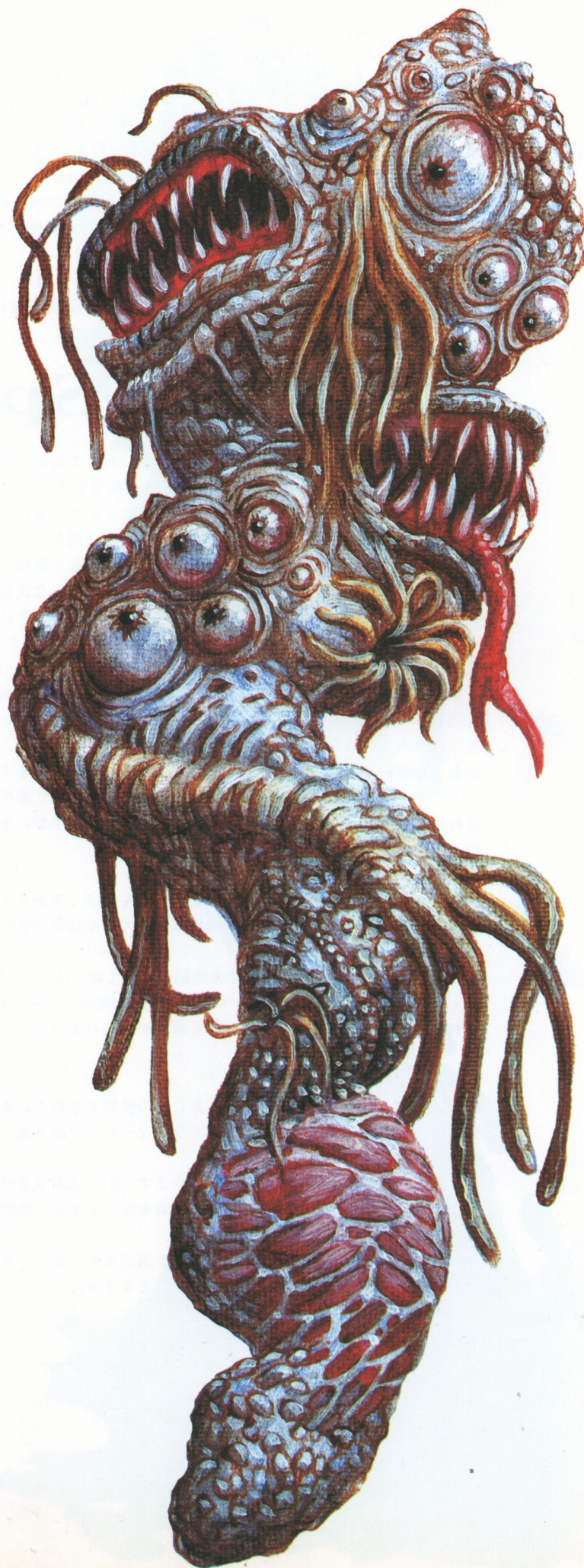
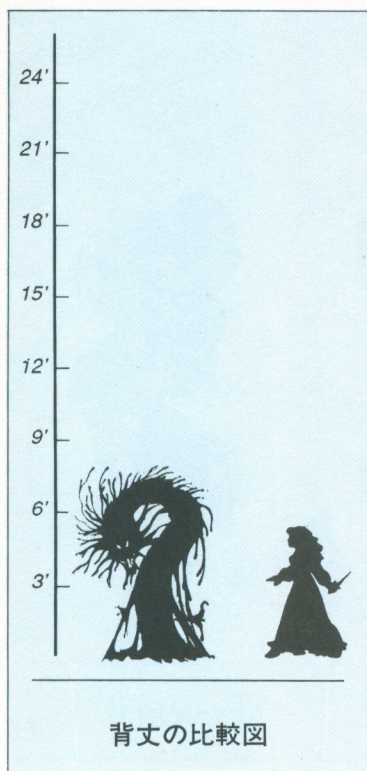
◆　星の精は盲目のものの出す不気味な笛の音とは大変違うクスクス笑うような音を出します。

◆　外なる神々の従者の出す笛の音には、狂気の響きがあります。知性の響きとか遠回しに知らせるような響きはありません。また、外なる神々の従者は足を突きだしたり、空を飛んだりすることはありません。

◆　ツァトゥグァの無形の落し子は色がまっ黒です。

地上での動き

盲目のものは、空を飛ばない場合には、つま先が５つに分かれている脚で体を支えて、移動します。この怪物は空を飛ぶことができるのですが、相当長い距離でも地上を歩き回ることが多いのです。

第10図――伸ばした脚

FLYING POLYP

背丈の比較図

(ツァトゥグァの) 無形の落し子

“……… クン・ヤンの民は、そこに生きているものを発見した。そいつらは石の通路に這いつくばってツァトゥガの像を崇めていた。だがしかし、そいつらはツァトゥガにさえ似ていなかった。恐るべし、像を崇めていたのは、不定形の黒いねばねばしたした塊だったのだ。それ以上のことは伝えられていない。逃げ帰った探検隊はヨトの下方への通路を閉ざした。

— H.P. ラヴクラフト＆ビショップ
『俘囚の塚』(真ク・リトル・リトル神話大系第10巻より：渡辺健一郎　訳)

Formless Spawn

この生き物はツァトゥグァと呼ばれる怪物に対する信仰に関係があります。無形の落し子は黒い液状の怪物で、電光石火の速さで体の形を変えることができます。必要に応じて、臨時の脚や歯や頭や目や翼を素早く形づくることができるのです。

彼らが作った石の工芸品を見れば、彼らが人間と同じくらいの知性を持っていることがわかりますが、今までのところでは、まだこの恐ろしい怪物と人間の間に交流があったことは１度もありません。〈無形の落し子〉は普通の物理的な武器ではダメージを与えられないので、探索者はこの奇怪な怪物となるべく接触しないようにしてきたのです。

生息地：主として地下です。地下に石の通路を作って、ネバネバした体で非常に速いスピードでその通路を這いまわります。今までに発見されたかぎりの証拠(ウォズリング、Wasling,1984年)によれば、彼らの生息範囲は地殻の部分に限られています。しかも、石灰岩その他の有機的な地層の部分に限られているようです。

分布：無形の落し子は暗黒の洞窟世界ン・カイに住んでいますが、多分それ以外の洞窟網の中にも住んでいると思われます。この生き物が地球上で進化したのかどうかということはわかっていませんから、他の惑星上にも無形の落し子がいる可能性があるかどうかもわかっていません。

生活と習慣：無形の落し子がエサとしているものは、さまざまな物質です。主として有機体の破片などを食べていますが、時には生きている動物や植物も食べるし、あれば茸類やカビの類なども食べます。

無形の落し子の繁殖方法や、生命周期については、ほとんど知られていません。ただし、ン・カイで発見された(ダンシーズ、Dannseys,1987年)こぶし大の方解石を遺伝学者が研究解明してくれれば、何かの答えが得られるかも知れません。

無形の落し子の見分け方——

◆　アザトースはずっと大きいし、常に別の怪物を連れています。
◆　盲目のものは普通は見えたり見えなくなったりを繰り返しています。また、短い飛行のためによく地上を離れます。
◆　ムーン・ビーストは薄い色をしています。黒くはありません。
◆　外なる神々の従者は悪魔的な吹奏音楽を奏でますが、無形の落し子は普通は音は出しません。
◆　ショゴスが移動するときは、転がるか這回るかします。素早く脚を形成したり、またすぐ次の脚を形成したりなどということはありません。

移動の仕方

体の上部の表面にある突起物が前に出て、体全体を前に引っ張ります。それから新しい突起物が後ろの方から出てきます。この図では移動のスピードがわかりませんが、時速30キロメートル以上のスピードです。

第11図——前への移動のための３段階

ユゴスよりのもの

“……… 甲殻類のような胴体に、ばかでかい背鰭——膜に似た翼と言ったほうがよかろうか——が何本も生え、反対側には関節肢が数組ついていた。それから、普通なら頭があるはずのところに、渦巻状の楕円体が乗っていて、その表面は多数のごく短い触角でおおわれていた”

— H.P. ラヴクラフト
『闇に囁くもの』(定本ラヴクラフト全集第5巻より：黒瀬隆功 訳)

背丈の比較図

Fungi FROM Yuggoth

ピンクがかった菌状腫のある甲殻類に似た生き物で、扇のような形の翼を持っています。典型的な種類のユゴスよりのものには、主要な手足が6本と、目鼻のないシワだらけの頭がついています。頭の部分は色が変わります。彼らは空を飛ぶことができますが、地球を取り巻いている大気の中では、非常に不器用にゆっくりとしか飛べません。彼らは頭の部分の色を急速に変えることによって、交信をします。遠く離れた所と交信をするときには、いろいろな色の混じった光線を発射させます。

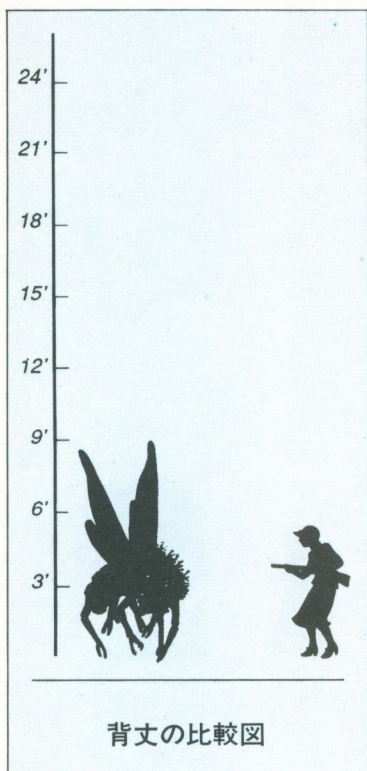
いくつもの違った種類のユゴスよりのものがいて、翼のないものや、体の構成部分が少し違うものもいます。しかし、種類の異なるもの同士も、仲よく一緒に仕事をするようです。ここで絵に示されているタイプのものは、地球にやって来た種類で、地球に来たのはこの種類だけです。ユゴスよりのものは実際にはfungi(きのこ)の一種などではありません。fungiという名前は、ミスカトニック大学のフォールワース教授がその研究の初期の段階で仮につけたもので、それがそのまま使われているのです。

ユゴスよりのものの探鉱夫たちは、特別に選んだ人間に相談をしたり、特別に選んだ人間を雇ったりして、作業をすすめていきます。そうやって、見なれない人間と接触することを避け、作業の安全を保つようにしています。

生息地：ユゴスよりのものが持っている科学をもってすれば、どんなところにもコロニーを作ることができます。原産地がどこかということについては、何もわかっていません。
分布：ユゴスよりのものは中生代に地球に侵略してきて、北半球にコロニーを築きました。後になって、それらのコロニーのほとんどを捨てました。現在ユゴスよりのものが見かけられるのは、人里離れた山岳地域です。たとえば、ヒマラヤ山脈地帯、アパラチア山脈地帯、アンデス山脈地帯などです。

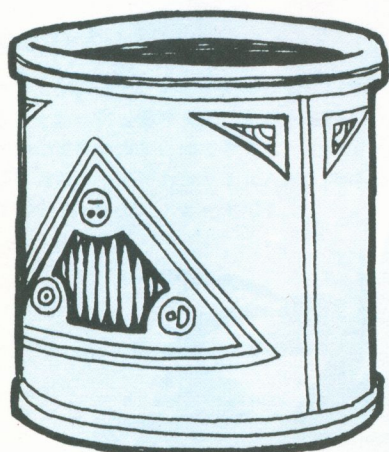
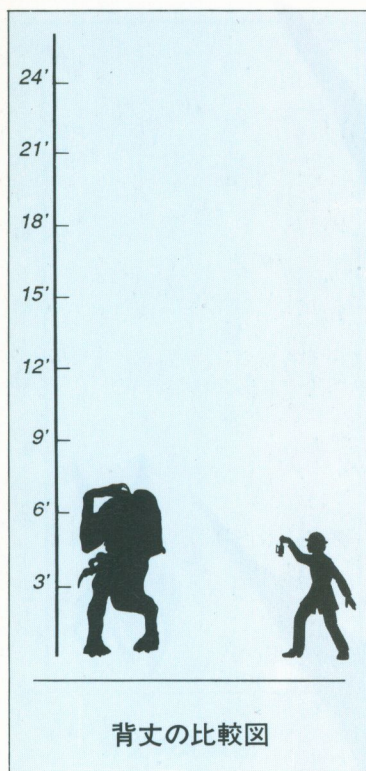
地球以外では、他の惑星や暗黒の星、その他の天体などの間に、広大な星間の帝国をもっています。地球にあるコロニーに1番近い主な基地はユゴス星(冥王星)です。
生活と習慣：ユゴスよりのものの体は、我々の知っている普通の物質でできているのではありません。彼らは大きな努力によって、体を形づくっている要素とか器官などを創造したり消滅させたりして、大きく変身をすることができます。ユゴスよりのものにいろいろな変種があるのは、進化によるものというより、この変身能力によるものなのでしょう。発声器官は、地球上で使えるような形に進化していて、奇妙なブンブンうなるような調子ではありますが、人間の言語の真似をすることもできます。

ユゴスよりのものは他次元間にも同時に存在しています。我々の知っている4つの次元の他に、他の異なる次元間にも同時に存在しているのです。地球を訪れるユゴスよりのものは、普通、膜のような翼を持っています。この翼で、地球にはないが他の惑星には普通にある中間媒体(地球で言えば空気のようなもの)を押して、宇宙空間を飛ぶことができるのです。

ユゴスよりのものの見分け方——
◆ ビヤーキーはたくみに飛びます。また、主たる脚は4本で、はっきりとした顔があります。
◆ 古(いにしえ)のものは翼が2枚以上あります。
◆ 夜のゴーントはピンクがかった色ではなく、黒い色をしています。
◆ 星の精はエサを食べているときは、ピンクがかった色に見えることもありますが、翼は持っておらず、また、食べ物を消化するにつれて、姿が見えなくなっていきます。

ユゴスよりのもののテクノロジー

この円筒形の容器の最終的な目的はわかっていません。カナダ北部でこれが発見されたときには、中に生きている人間の脳が入っていました。中央の網状のカバーのまわりに、コンセントの差込み穴が3つあいていることに注意してください。

第12図——大脳保存容器

次ページ左下のスケッチは、ユゴスよりのものの別の姿

FUNGI FROM YUGGOTH

背丈の比較図

ガスト

"………小さな馬ほどの大きさの何ものかが、薄闇の中に跳び出した。おぞましくも嫌らしい怪物だった。その顔は、鼻や額その他の重要な部分がないにもかかわらず、妙に人間に似ていた………咳をしているような、独得の喉声で話すのだ"

— H.P. ラヴクラフト

『幻夢境カダスを求めて』(定本ラヴクラフト全集第３巻より：小林勇次　訳)

Ghast

人間の目から見ると、これほど胸のわるくなるような嫌らしい地下生物はめったにいないでしょう。ガストは不器用そうな白っぽい巨大な怪物で、背中の所には黒い毛が生えています。鼻のない、唇の厚いその顔は、遠い祖先が人間だったに違いないことを感じさせます。彼らはちょっとした光線に対しても苦痛を感じ、太陽光線を直接受けたりすれば、間もなく死んでしまいます。

ガストには、ジンの洞窟の中に住んでいるガストと、クンヤンの洞窟の中で家畜のように飼育されたガストの２種類があることが知られています。飼育された方の種類は、ガストというより、ギャー・ヨスン（単数形はギャー・ヨス）という名の方が知られています。額のまん中に角の痕跡のようなものが１本生えているのは、ギャー・ヨスンだけです。

どの種類のガストも、たいへん活発な生き物です。強い後ろ足で跳んだりはねたりして、人間が跳べる数倍の巾を跳び越すことができます。

生息地：地下の深い所。太陽光線に当たれば死にますが、赤い光あるいは薄明りの中なら生き続けることができます。クンヤンのギャー・ヨスンは、青い光にも耐えることができます。ある理論学者(イジンウィル、Isinwyll,1985年)は、ギャー・ヨスンが青い光の中で生きることができるのは、彼らが異世界の特殊な環境にさらされたとき、順応して変わったからだという説をとなえています。よりつっこんだ研究(マストール、Mustoll,1985年)によって、ギャー・ヨスンは筋肉組織が増えていること、内臓の配置が少し変わっていることなどがわかり、理論学者の説と一致しています。

分布：地下の中だけです。アメリカ大平原の下に、青い光に照らされたクンヤンの洞窟が発見されました。下にジンの洞窟があるヨスの洞窟も北アメリカにありますが、その正確な位置はわかっていません。

生活と習慣：ガストは雑食で、主としてキノコの類をエサにしています。肉が手に入れば、喜んで肉を食べます。また、よく共食いに走ることもあります。

ほとんどのガストは単純な言葉を持っています。ギャー・ヨスンはかつてはわずかながらも知性らしきものがあったのですが、繁殖を繰り返すうちにそれもだんだん失われてしまいました。

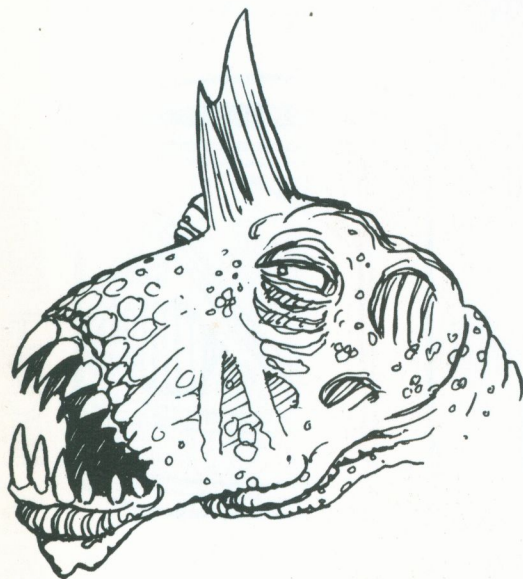
ガストの見分け方——

◆　深きものはゴムのような皮膚をしていて、蛙あるいは魚のような外観をしています。

◆　空鬼は短くてねじ曲がった後ろ足をしているし、跳んだりはねたりすることは絶対にありません。

◆　食屍鬼(グール)は遠くから見ると、ガストに似ています。しかし、ガストは食屍鬼(グール)よりずっと遠く、ずっと高く跳びます。

ギャー・ヨス

角が突き出ていること、口と牙が目立たなくなっていることに注意してください。耳と赤外線感受器官が、耳の下と後ろに示されています。

第13図——ガストの亜種

ほとんどのガストは、隣のページの絵のガストより淡い色をしています。

GHAST

食屍鬼（グール）

“それは、名もしれぬ巨大な魔物で、血走った眼であたりをにらみすえ、がっしりしたかぎ爪で、かっては人間であったがもはや名状しがたくなったものを掴み、子供が棒飴を少しずつしゃぶるようにその頭をかじっていた。低く構えた姿勢をとっており、今にも喰いかけの餌食を投げ棄て、もっと汁気のたっぷりあるご馳走を捜し始めるかもしれないと思えるのだった。”

— H.P. ラヴクラフト

『ピックマンのモデル』(定本ラヴクラフト全集第３巻より：黒瀬隆功　訳)

背丈の比較図

Ghoul

完全な人間の形をしているわけではありませんが、人間の姿に非常によく似ている場合もあります。だいたい２本足で歩き、前かがみの姿勢で、どことなく犬に似た感じがします。皮膚はゴムのような感じで、耳はピンと立っているし、体にはカビがこびりついており、半分に割れたヒズメ、穴を掘るのに使うウロコのあるかぎ爪がついています。

生息地：食屍鬼（グール）はだいたい自分用の穴に住んでいますが、もう少し大きい共同の地下の棲み家に住んでいる場合もあります。彼らは夜行性の生き物です。食べ物の好みが好みなので、人間がたくさん住んでいる所の近く、特に、墓地、病院、学校、ショッピング・センターなどの近くにたくさんいます。

分布：地球上どこでも。ドリームランド以外には、地球外の星では食屍鬼（グール）の棲み家は見つかっていません。食屍鬼（グール）は人間のいない所では生きていけない生き物であると信じている者もたくさんいます(ギルマン、Gillman,1984年)。

生活と習慣：食屍鬼（グール）の食べ物は、主として腐肉です。しかし、彼らは腐っていない生肉を食べることもできて、ちょっと変わったご馳走として、鋭い歯とかぎ爪で不運な犠牲者の肉を引き裂いて食べることもあります。

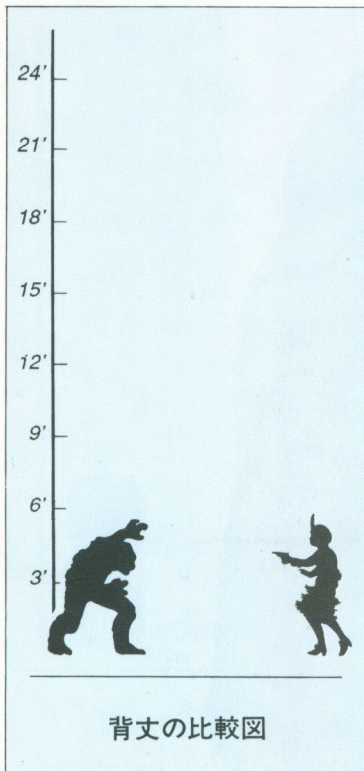
ちょっと聞きなれないことかも知れませんが、食屍鬼（グール）は人間から変化していった生き物のように思われるところがあります。食屍鬼（グール）という種が別にあるのではなく、先祖は人間だったのかも知れません。初期の研究(フォールワース、Fallworth,1927年)によれば、食屍鬼（グール）は環境によって人間のような性癖を増大させることができるということです。しかし、人間と食屍鬼（グール）との遺伝的な関係は解明されていません。ときどき、飼育係のような食屍鬼（グール）が人間の子供をさらって、食屍鬼（グール）として育てることがあります。また、成人している人間が、食屍鬼（グール）とつき合うようになって、もともと食屍鬼（グール）と気の合う素質があったりした場合には、しまいに自分も変身して食屍鬼（グール）になってしまう場合もあります。食屍鬼（グール）の生理には、多分モラルを腐敗させるもの、毒のようなものが含まれていて、つき合う人間を自分たちと同じ怪物に変身させる力があるのではないかと思われます(ダンシーズ、Dannseys,1986年)。

食屍鬼（グール）は高い知性も持っているし、人間の社会、人間の行動、人間の心理というものをよく知っているので、彼らについて研究することはおろか、彼らを見つけることさえなかなか難しいことです。

食屍鬼（グール）の見分け方——

◆　深きものは普通、水のそばにいるし、魚臭い匂いを発しています。

◆　空鬼は動きののろい、シワクチャな感じのする怪物です。また、顔にははっきりとした目鼻立ちがありません。

◆　ガストは大きな後ろ足で跳びます。それに鼻づらがありません。

変身の痕跡

食屍鬼（グール）に変身すると、顎が伸びて、そこの筋肉組織が発達します。そして頭蓋骨は平たい形になって横に張り出します。人間が変身した食屍鬼（グール）の頭蓋骨には眼球のためのくぼみが完全な形でくぼんでおり、頬骨の痕跡もはっきりと見られます。

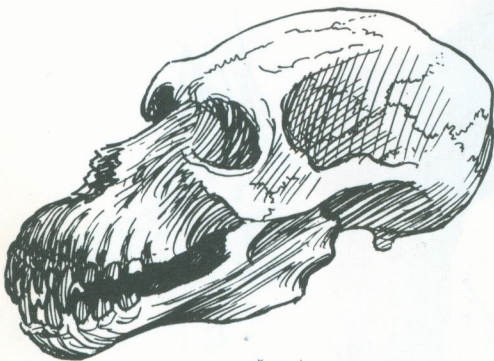



図14. 食屍鬼（グール）の頭蓋骨

GHOUL

背丈の比較図

イスの偉大なる種族

“そのあらましはいつも同じようなもので、研ぎすまされた頭脳の持ち主が、突然奇妙な別の存在に取りつかれ、短期間、あるいはもっと長期にわたって、まったく違った人間として過ごすというものだった。人格の変化はまず、喋り方や身体の動かし方がぎこちなくなる点に認められるが、やがて科学や歴史、芸術、人類学の分野でのあるとあらゆる知識を獲得することを特徴とする。それも、まるで熱病にでもかかったような烈しさで知識をむさぼり、異常きわまりない吸収力を発揮するのである。”

— H.P. ラヴクラフト

『超時間の影』(定本ラヴクラフト全集第６巻より：福岡洋一　訳)

Great Race OF YITH

大きな円錐型の体に４本の長い触肢のついている怪物で、触肢の先にはいろいろな有用な器官がついています。知性があり、生命周期の長い生き物です。

イスの偉大なる種族を発見した人物(ピースリー、Peaslee,1936年)は、この種族が自然史、心理学、時間物理学に関して、非常に組織立った巾の広い研究をなしとげていると述べています。彼らの理知主義と謙虚さを考えた場合、しかも、彼らが相手の全滅をもくろむ恐ろしい侵略と地球上の恐ろしい戦争を行なう種族であることを無視して考えた場合、読者はイスの偉大なる種族をまるで穏健な僧侶たちの集まりのように思うに違いありません。

偉大なる種族という名前は、彼らが時間というものを征服したことから、名づけられたものです。彼らは永劫の時を超えて、精神を他の時代の他の生き物の体の中へ送り込み、その体を乗っ取る能力を獲得したのでした。この種族はもともとは遠い異世界の生き物だったのですが、その世界が破壊に瀕したときに、他の世界へ移住することにしたのでした。その頃の地球には、今ではまったく知られていない円錐型の古代生物が住んでいました。偉大なる種族はその円錐型の生物の体を乗っ取ることによって、地球に移住してきました。この地球侵略が行なわれたのは、今から何億年も前のことです。

偉大なる種族は、偉大なる科学者であり、学究の徒でした。ときどき、選ばれた人間と精神を交換することがあります。現在の人間の文化を研究するためです。彼らは人間社会の中に、小さな教団を作って、精神のタイム・トラベルをする学者を探したり、そういう学者に手を貸したりしています。教団のメンバーは、偉大なる種族に手を貸してやるかわりに、技術や知恵を授けられます。偉大なる種族のタイム・トラベラーは、ハスターや黄色い印に関連した残酷な組織によって選ばれることもあります。組織が適当な学者を選んで、拷問によっていろいろな情報を得るのです。

生息地：極寒地以外のところなら、どこでも。ただし、温帯よりは熱帯の方を好みます。
分布：イスの偉大なる種族は、盲目のものの襲撃によって何百万年も前に絶滅しました。しかし、彼らは絶滅の直前に、リーダーたちの精神を、遠い未来の科学者の体へと送ったのでした。その未来社会では、人類はもう滅亡していますが、ある甲虫類が繁栄しています。偉大なる種族のリーダーたちの精神は、その甲虫類の知性を乗っ取ります。
生活と習慣：偉大なる種族が栄養を摂取するのは、液体からだけです。後ろの触肢についている４つの赤いトランペット型の器官から、栄養を吸収するのです。また、繁殖は大きなカタツムリのような形をした足の先から浅い水の中に胞子を放出することによって行ないます。

イスの偉大なる種族の見分け方——
◆　円錐型の特徴ある体を見れば、他と見間違うことはありません。

記録をつける

金属製の板に情報を焼き付けて記録しています。これなら、美的にも満足できる形で、何億年もの間記録を保存しておくことができます。彼らはこの他にも、もっと手早くて正確なデータの保存および取り出しの方法を知っていました。しかし、この方法では、１億年を超えると完全な状態では保存できません。したがって、この方法で保存されていたデータは今では失われてしまっています。

図15．熱針の操作

背丈の比較図

ティンダロスの猟犬

“………宇宙的恐怖を扱った文学が存在しても何ら不思議がる必要はない。実際、いつでも存在していたものであるし、今後も存在しつづける筈である。この種の文学が実にねばり強い生命力をもっている何よりの証拠に、まったく正反対の傾向の作家たちがそれぞれ時折、衝動に駆られては恐怖小説に手を出して他に類を見ない作品を残している。まるで、そうでもしないことには、自分の心が何がしかの亡霊に取り憑かれてしまうから書いているのだという様子である。”

— H.P. ラヴクラフト
『文学と超自然的恐怖』(定本ラヴクラフト全集第7-I巻より：植松靖夫　訳)

Hound Of Tindalos

ティンダロスの猟犬は、地球上の建物の部屋の隅から突然姿を現す恐ろしい4つ足動物です。時空を超えてやってきて、食おうと思う生き物を襲うのです。ティンダロスの猟犬の中の典型的なものは、曲がりくねった長い舌をもっていて、青い色をした膿のような、臭いいやらしい物質をダラダラと垂らしています。

正直なところ、ティンダロスの猟犬は普通の人間の理解を越える怪物です。有機的な生物のように見えますが、実は彼らは有機的な存在物ではないのです。人間が“不浄”と呼んでいる観念が実体化したものです。“不浄”とは、当ハンドブックに出てくる他の怪物の中のいくつかも共通して持っている超幾何学的かつ組織的な軸なのです。概念としての“不浄”というものを簡単に説明するのは非常に困難です。と言うのは、我々人間がものの状態を認識する場合には、明確な各要素を認識するのであって、多面的なかたまりとして認識するのではないからです。

しかしながら、Isinwyll(イジンウィル、1987年)が、「われわれがティンダロスの猟犬を単に“忌まわしさ”とか“恐ろしい空腹”とかの特殊な形としてしか認識できなかったとしても、かえってその方がいいのだ」と述べているのは、まったく当を得ていると言えるでしょう。われわれがティンダロスの猟犬をもっと正確に、もっと強調した形で理解したとしたら、どうなるだろうかと考えてみてください！

生息地：遠い遠い過去の時間の角(かど)。宇宙形成以前から存在しているという不確実な証拠らしきものもあります(ハイク、Hike,1983年)。
分布：遠い遠い過去。ただし、ティンダロスの猟犬は空腹その他の悪意ある目的のためには、どのような時代にも、またほとんどどんな場所にも行くことができます。
生活と習慣：人間および人間以外のある種の生物の先天的な性質、あるいはそれらの生物の心霊的な要素の中の何かがティンダロスの猟犬を引きつけるようです。猟犬はそこから栄養を摂取するのです。その要素が猟犬が生きながらえるために必要でなければ、猟犬は相手を襲って食うなどということはほとんどしません。

ティンダロスの猟犬は90°以下の角度を通ってしか、姿を現すことはできません。その角度は、部屋の隅の角度であっても、岩の割れ目の角度であっても、葉の折れ曲がった角度であってもかまいません。猟犬が現れるときには、角度のあるところから蒸気の雲が立ち上りはじめ、またたく間にその煙が合体して猟犬の姿が実体化されます。

猟犬の生命周期がどうであるか(彼らに生命周期というものがあるとしての話ですが)は、まったく知られていません。また、猟犬に襲撃されたという何十もの記録(ウォズリング、Wasling,1982年)はあっても、具体的・物理的な証拠はまったく残されていません。

ティンダロスの猟犬の見分け方——
◆　空鬼は部屋の隅で実体化されるとは限らないし、2本足で歩きます。

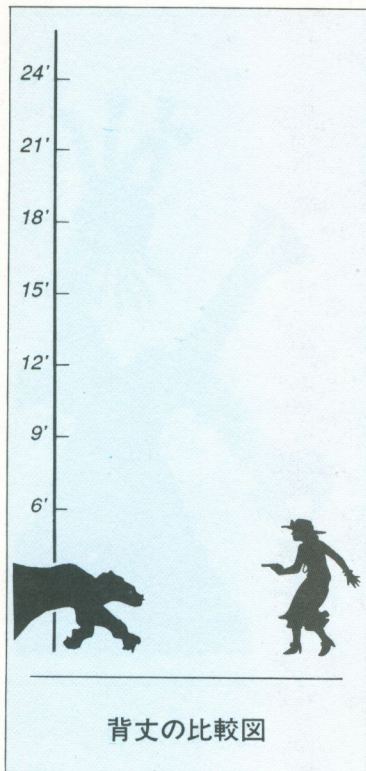
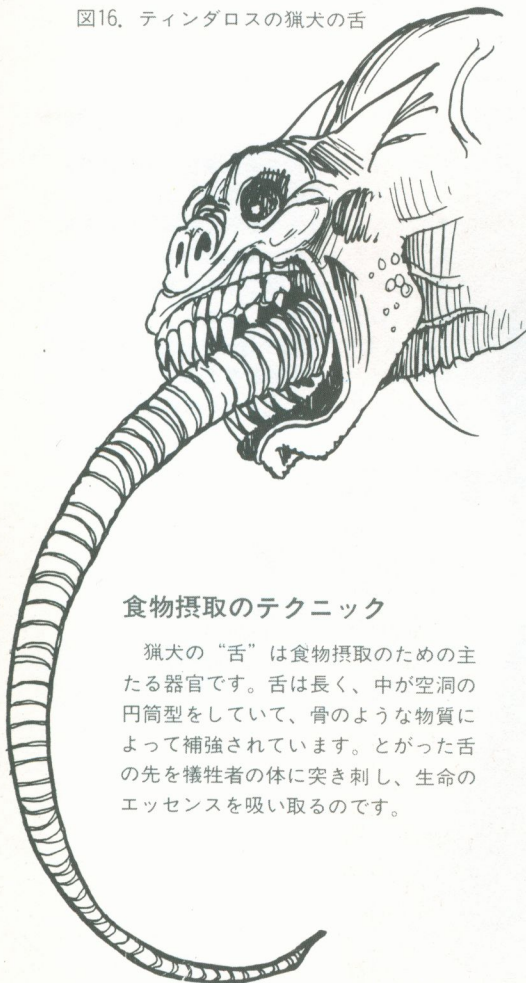
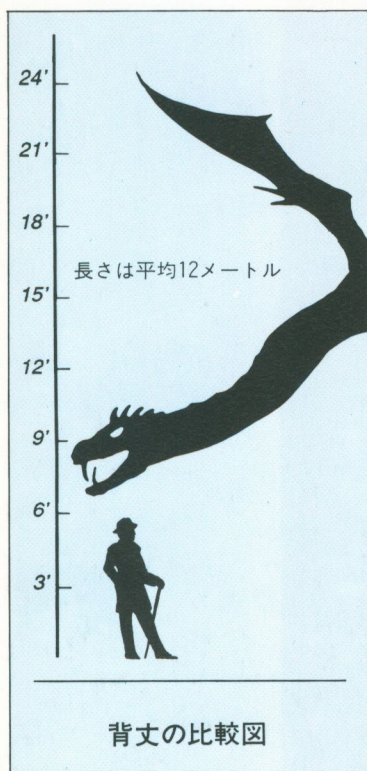



図16. ティンダロスの猟犬の舌

食物摂取のテクニック

猟犬の“舌”は食物摂取のための主たる器官です。舌は長く、中が空洞の円筒型をしていて、骨のような物質によって補強されています。とがった舌の先を犠牲者の体に突き刺し、生命のエッセンスを吸い取るのです。

HOUND OF TINDALOS

忌まわしき狩人

“彼らの背後や頭上にそびえ、彼らをちっぽけな存在に見せてしまったのは、我々のまわりを徘徊し、我々の中にもある恐怖の幻影、恐ろしいほど身近な深淵でのたうち、よだれを流している虫であった。”

— H.P. ラヴクラフト

Hunting Horror

知性のある細長いロープ状の怪物で、水かきのようになった翼で空を飛びます。飛んでいるときには、心臓の鼓動のような脈動に合わせて細長い体が脈打ち、ふくらみます。翼が2枚ある種類と、1枚しか翼のない種類があります。翼が1枚しかない種類の忌まわしき狩人は、空中に浮いているために、奇妙な具合いに翼を回転させます。すべての忌まわしき狩人は翼をゆっくりとリズミカルにはばたかせます。また、体を苦しそうにくねり曲げることと、頭をブラブラさせることで、容易にそれとわかります。

忌まわしき狩人は普通の物質でできているのではありません。我々の次元と隣接している他の次元との間に同時に存在しています。ちょうどユゴスよりのものと同じです。忌まわしき狩人は空を飛んで、他の次元世界に充満している媒介物(地球で言うと空気にあたるもの)を翼で叩くことによって生じる圧力の力で、そのコイル状の体を空に浮かせておくことができます。

忌まわしき狩人は大きな耳障りな声ではありますが、人間の言葉を話すことができます。外なる神あるいは旧支配者、特にニャルラトテップは、犠牲者を追跡する場合によくこの忌まわしき狩人を使います。

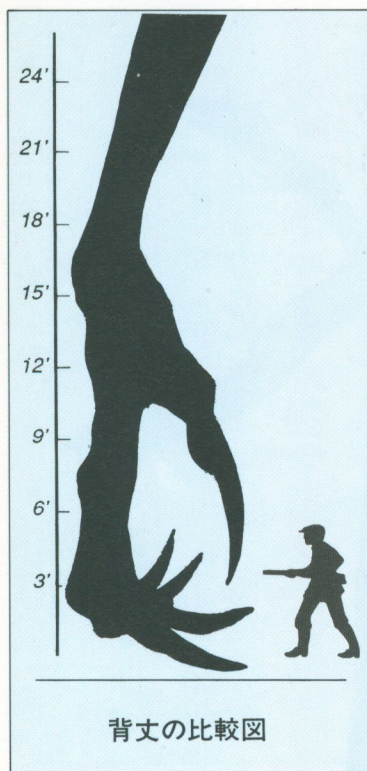
生息地：荒れはてた異世界。今までに、地球上で忌まわしき狩人が見かけられたのは、獲物を追っている姿と、超幾何学的その他の形而上学的テクニックによって召喚されたときだけです。

分布：お互いに遠く離れた2、3の世界から発生してきた怪物ですが、今ではいくつもの宇宙にまたがって分布しています。ほとんどどんな所でも、偶然に遭遇する可能性はあります。

生活と習慣：自然の状態では、暗黒の惑星に住んでいます。忌まわしき狩人は極端な明るい光には耐えることができません。普通の日中の光でも、2、3時間以上は耐えられません。したがって、彼らが地球を訪れるのは、普通、日が暮れてからです。惑星間には常に太陽光線がありますから、忌まわしき狩人が実際にそこへ飛んで行くものかどうか、意見が分かれています。彼らがどの辺にいるのかということに関してまとめた本も出版されています(ギルマン、Gillman,1986年)。

忌まわしき狩人は非常に知性の高い生き物です。社会的な組織を作らずに活動し、物質文明を築くこともしません。ダンシーズ(Dannseys,1987年)は忌まわしき狩人のオカルト術に関する知識は大変深いので、人間などとテクノロジー交換をしたり、情報交換をしたりする必要がまったくないのだと述べていますが、それに関しては激しい論争がありました。ヴァースン(Varson,1988年)は忌まわしき狩人には複雑なテレパシー的な情報収集網が存在している証拠があると主張しました。それで他人のオカルト術の知識を読み取るのだと言うのです。しかし、ヴァースンは自分のデータを実際に再現しようとする試みには失敗しました。生きている忌まわしき狩人を調べるすることが大変困難なことだったからです。形而上学者たちは常にこの点に悩まされています。

忌まわしき狩人の見分け方——

◆　シャンタク鳥はもっと短くてずんぐりした体型をしているし、後ろ足がついています。

忌まわしき狩人の頭

この図に見られるほとんどの穴、うね、らせん型の組織などはすべて感覚器官です。例えば、鼻づらの左右についているヒゲのようなものは、空気の流れを感知するための器官です。獲物となる生き物が呼吸するために起こる、空気の圧力のわずかな差を感じ取ることによって、獲物の存在をキャッチすることができるのです。この他の器官は、熱、光と色、電導率、匂い、質量などを感じ取る器官です。

図17．忌まわしき狩人のクローズ・アップ

HUNTING HORROR

背丈の比較図

イタクァ・ザ・ウェンディゴ

“思いもよらぬ異常な出来事がさりげない言葉で、半ばは隠したままほのめかされて、読者がその言葉を額面どおりに受けとってあまり疑わずにいると、話者の空ろな声の緊張が破れて、名状しがたい裏の恐るべき意味が伝えられてくる。

— H.P. ラヴクラフト

『文学と超自然的恐怖』(定本ラヴクラフト全集第７-Ｉ巻より：植松靖夫　訳)

Ithaqua THE WENDIGO

ウェンディゴの立てる遠吠えのような声は、聞き違えることはありません。その声を聞いた者は、２度と忘れないでしょう。巨大で、かなり人間に似ているこの怪物は、風に乗って歩いているように見えます。イタクァが存在するのは、極北の地だけで、普通は凍てつくようなみぞれや吹雪と共に現れます。

イタクァは１匹だけでいるのを見ることもありますが、よく他の小型の怪物の一団を引き連れていることがあります。その中には、不運な人間もいますが、そういう人間は、後に凍ってツンドラの下に半分埋まった形で発見されることになるのです。

イタクァは他の小型の生き物を、小型のイタクァに変えてしまうことができます。斥候として使うため、あるいは仲間にするため、あるいは何か我々にはわからない目的に使うために、人間その他の生物を小型のイタクァに変えてしまうのです。人間がイタクァに変身する場合には、足の形が完全に崩れ、極寒の温度にも平気で耐えられるようになり、常に人肉を食らいたいという耐えがたいほどの渇望を持つようになり、そのためにしまいには気が狂ってしまいます。

ウェンディゴあるいはウィンディゴという称号は、アルゴンキン族インディアンの言葉からきたもので、始めはイタクァによって変身させられた人間のことを指す言葉でした。

生息地：外宇宙、氷の平原、ツンドラ地帯、高山地域。地球は北極地帯でさえも彼らにとっては暖かすぎるのです。したがって、彼らは地球には永久的に住むということはしません。

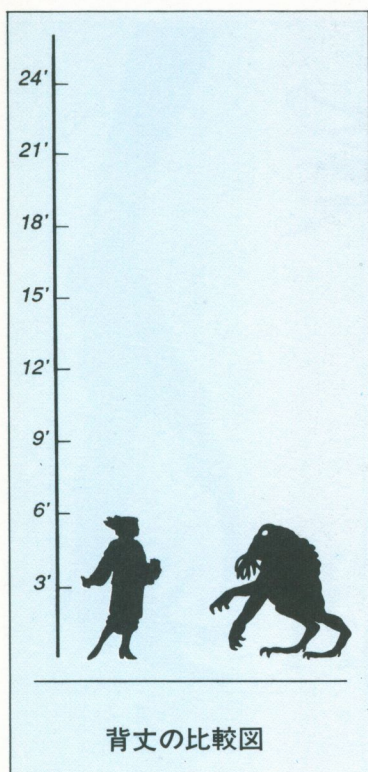
分布：南極なら、彼らにも何とか住める場所だと思われますが、南半球でウェンディゴが見かけられたことは１度もありません。なぜなのかはわかりません。イタクァは太陽系の中をくまなく動き回り、寒い世界であれば立ち寄ります。われわれの太陽系にあるオート星雲で、ほとんどの時を過ごしているのかも知れません。すい星が出てくる星雲です。イタクァは少なくとももう１つの別の恒星系の中にもたくさん存在しています。

この怪物によく似た別の怪物が銀河系に存在しているかも知れません。イタクァはもしかしたら、非常にパワフルな種族の中の一員なのかも知れません。１人１人が１つの銀河系、あるいは１つ以上の銀河系を巨大な縄張りとして所有しているのかも知れません(ハイク、Hike,1983年)。

生活と習慣：ウェンディゴはほとんどの時間を縄張り内を旅行して回ることで過ごしています。当然、地球にも来ますが、地球が彼らにとっては気温が高すぎる所であることを考えれば、その割には、地球を訪れる頻度は意外に多いと言えるでしょう。多分、地球にはおいしいエサがたくさんあるので、よくやって来るのかも知れません。

イタクァの見分け方——

◆　クトゥルフの落し子は極寒の地にいることはめったにありません。また、空を飛ぶのは、翼を使って飛ぶ場合だけです。

◆　異常に大きい深きものは空を飛ぶことは絶対にありませんし、いつも水の近くにいます。

ウェンディゴ

このスケッチは、あやうい所でウェンディゴから逃れることのできたケベック北部のあるワナ師が描いたものです。もとは人間であったという痕跡が明確に見られますが、全体的に大きく変化してしまっています。

図18. ウェンディゴから逃れた人の描いたスケッチ

ムーン＝ビースト

“月は三日月で、近づくにつれ益々輝きを増した………（ガレー船の）行き先は、地球から絶えず背けているあの秘密の謎の面であった………（カーターは）あちこちに崩れているその廃虚の規模と形状が気に入らなかった。山々の上に立つ荒廃した神殿は、しかるべき神々あるいは健全な神々の栄光を讃えることができるようには置かれておらず、崩れ落ちた柱の対称的な配置には、解きえぬ、何か隠された秘密の意味があるように思われた。”

— H.P. ラヴクラフト

『幻夢境カダスを求めて』（定本ラヴクラフト全集第４巻より：小林勇次　訳）

Moon-Beast

典型的なムーン＝ビーストは灰色がかった白色の、大きな油っぽい体をした怪物で、体の容積を縮めたり、引きのばしたりすることができます。体の形は一口に言うと、ヒキガエルに似ています。視覚器官がなくて、ただ鼻づらの先にかたまって生えて震えている短い（そして普通はピンク色をした）触角だけが、視覚器官の代わりをしています。この怪物は見えないというハンディキャップを、高い知性と徹底的な残忍さによって補っています。

ドリームランドにあるムーン＝ビーストの文明社会では、奴隷取り引きが広く行なわれています。エサとして、および労働力として、奴隷を使うのです。奴隷たちは宇宙のあらゆる所から連れて来られます。月に近いということで、人間もムーン＝ビーストの奴隷商人にとって格好の奴隷となっています。

生息地：ムーン＝ビーストが耐えることのできる天候や条件は、かなり巾の広いものです。また、豊富な技術知識を使って、耐え得る範囲をかなり広げることもできます。したがって、ムーン＝ビーストのコロニーはどんな所にでもある可能性があります。

分布：彼らは地球上では見かけられたことがないように思われます。しかし、思考上の次元、通称ドリームランドという名で知られているあの次元にある月には、ムーン＝ビーストが横行しています。

ムーン＝ビーストはドリームランドにだけいるのかも知れません。あるいは、ドリームランドのある次元の月の上に、彼らの心霊的な痕跡が残っているのかも知れません。あるいは、ムーン＝ビーストのコロニーがドリームランドにおいて、我々の次元においてよりも、ずっと急速に広がったというだけのことかも知れません（フォールワース、Fallworth, 1922年、キルトン、Kylton, 1979年）。アポロ11号による写真を分析してみると、月の向こう側の面には、ムーン＝ビーストのコロニーがあるかも知れないという可能性が捨てきれません。しかし、人間たちは日に夜をついで、月の観測をしているにもかかわらず、いまだにはっきりとしたことはわかっていません（ダンシーズ、Dannseys, 1971年）。

生活と習慣：ムーン＝ビーストがまだ生きている生き物だけをエサにしていることは確かです。犠牲となった生き物の体と魂から、怪しげな栄養素を取り込んでいるのです。

ムーン＝ビーストは拷問を楽しむ性癖があります。犠牲となった生き物の断末魔の苦しみを見て、ゆがんだ喜びを感じるらしいのです。この性癖はあまりにも顕著であるため、拷問をすることから精神的あるいは肉体的に何か直接的な利益を得るのかも知れません。

ムーン＝ビーストの見分け方——

◆　ツァトゥグァの無形の落し子は黒い色をしています。

◆　外なる神の従者はムーン＝ビーストよりももっとはっきりした形がなく、手足の代わりに触肢があるだけです。

レンからの男

この人間に似た男は、何世紀もの間、ムーン＝ビーストの奴隷・召使いとして仕えてきて、もうムーン＝ビーストとは切っても切れない関係になっている種族です。レンからの男は地球のドリームランドにだけしかいません。

図19．全体図

次ページの絵は、特別に体の大きいムーン＝ビーストです。

MOON-BEAST

背丈の比較図

夜のゴーント

“……… 彼らは話すこともなく、笑うことも微笑むこともないのである。それというのも、彼には微笑むべき顔が全然ないからであり、顔のあるべきところには、意味あり気な空白があるばかりである。彼らのすることといえば、摑んで、飛んで、くすぐることだけであり、それが夜のゴーントのやり方なのである。”

— H.P. ラヴクラフト

『幻夢境カダスを求めて』(定本ラヴクラフト全集第４巻より：小林勇次　訳)

Nightgaunt

人間に似たところがありますが、顔がなくて、コウモリのような翼、角、トゲのついた尾、なめらかなクジラのような皮膚をしています。夜のゴーントは社会を作って活動する怪物で、遭遇するのはほとんどの場合大きな群れです。知性はありませんから、力のある異神のペットあるいは召使いになっています。夜のゴーントは声を出す能力がなく、音を立てずに飛びます。夜行性の怪物なので、昼間見かけられることはほとんどありませんが、光によって特にダメージを受けるわけではないようです。

生息地：夜のゴーントは山の中の洞窟に巣を作るのが好きですが、どんな地形の所でも出没します。

分布：ドリームランドと言う名で知られている次元に主として分布しています。夜のゴーントは自分の主人が守れと言った物(あるいは場所)の近くに巣を作ります。主人はその場所を敵に侵入されないようにするため、あるいは、常時犠牲者を供給できるようにその場所を確保しておきたいため、夜のゴーントに守らせるのです。

生活と習慣：夜のゴーントはその場所を守るために、闇の中から突然飛びだして来て、侵入者を捕まえて連れ去ります。犠牲者が抵抗して戦おうとすれば、犠牲者をくすぐるか、つかんで押え込みます。犠牲者が手ごわい相手であることがわかると、つかんでいた手を放して下に落としてしまいます。しかも、非常に高い所から落とすのです。落とされずに連れて行かれた者は、最後には極端に危険な場所に置き去りにされます。例えば、地下の洞窟世界とか、生き残るすべのない異界のジャングルとか、食肉獣がうろついている砂漠の中などです。

夜のゴーントが摂取する栄養は、主人から与えられる物だけです。主人となる生き物のある種類は、その黒い垂れ下がった胸から乳を飲ませるようにして夜のゴーントに栄養を与えることが知られています。この他の方法ももちろんあるに違いありません。

しかし、夜のゴーントがどうやって食べ物や栄養となる液体を吸収するのかは、わかっていません。はっきり口だ言えるような器官はないし、そういう穴らしいものもありません。排せつのための器官もありません。それに、夜のゴーントには視覚器官も見あたりません。しかし、彼らは正しく方向を定めることができるし、こまかい操作もできます。また、彼らの繁殖の周期や、生命周期はまったく知られていません。

夜のゴーントの性質や能力については、まだまだ研究の余地がたくさんあります。興味のある人は、ミスカトニック大学の“夜のゴーント研究センター”のギルマン博士に連絡をしてください。

夜のゴーントの見分け方――

◆　ビヤーキーはうるさい音を立てるし、はっきりとした顔とあごを持っています。
◆　ユゴスよりのものは色がピンクがかっているし、あざやかな色の顔がついています。

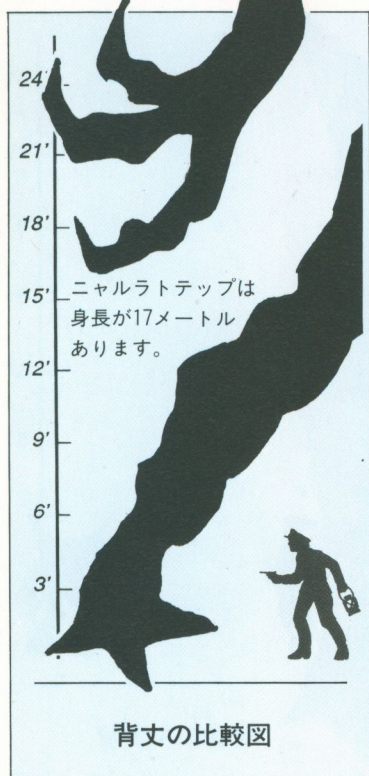
夜のゴーントと獲物

怪物は犠牲者をつかむのに、４本の手足をすべて使います。犠牲者を押さえつけるために、尾も一緒に使う場合もあります。

図20. 獲物をくすぐる

NIGHTGAUNT

背丈の比較図

ニャルラトテップ

“ただ、あざけるために、ニャルラトテップは安全な道と　麗なる夕暮れの都市への道を計画したのだ。ただからかうためにのみ、あの邪悪な使いは秘密を明かしたのだ……… なぜなら、狂気とあの空無のすさまじい復讐が、出しゃばりに対するニャルラトテップの唯一の贈物だから……… ”

— H.P. ラヴクラフト
『幻夢境カダスを求めて』(定本ラヴクラフト全集第４巻より：小林勇次　訳)

Nyarlathotep

“這い寄る混沌”ニャルラトテップは、外なる神たちの精神であり魂です。神たちの持つパワーに個性を与えるのです。ニャルラトテップ以外の外なる神たちは、他の等級の低い怪物たちを破壊するだけですが、ニャルラトテップはそういう怪物と知的に交流することができます。報酬を与えたり、刑罰を与えたりすることができます。知性のある種族たちの多くは、ニャルラトテップからよく思われたいばかりに、外なる神たちに仕え、礼拝しているのです。

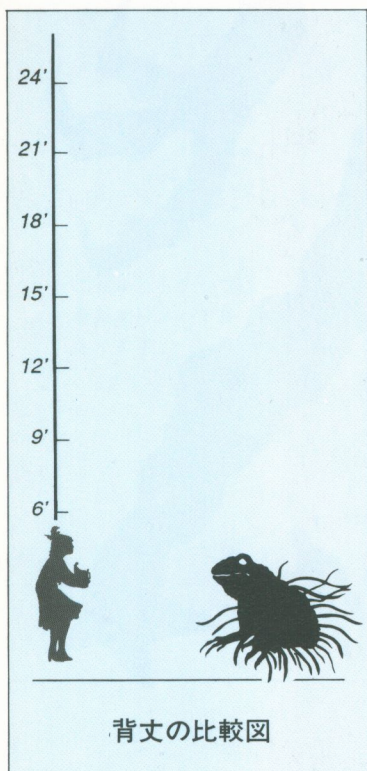
ニャルラトテップは目的によって、違う姿になります。人間を相手にするときには、人間のような姿になるのです。ニャルラトテップの計画や望みは、ほとんどが人間にとっては悪いものばかりです。人間性というものは、少なくとも正気の状態では、ニャルラトテップにふさわしくないものでしょう。

生息地：時空を超えたところ。よくアザトースと一緒にいます。
分布：ニャルラトテップはすべての時、すべての場所を訪れたことがあります。
生活と習慣：ニャルラトテップはいろいろな方法を用いて、外なる神たちの意志を増強させます。主として、その土地土地で協力者を手に入れるという方法です。真に絶対的な力が必要になった場合には、ニャルラトテップは彼の主人である神の強大な力を使います。

ニャルラトテップの見分け方——
次はニャルラトテップが地球上で用いる姿です。
◆“ブラック・ファラオ”、色の浅黒いほっそりした体つきの男で、背もあまり高くありません。着ている物も普通の現代風の服装です。
◆“黒い男”、背の高いやせた男で、毛が１本もなく、黒たんのように真っ黒な皮膚をしていますが、顔立ちは白人のような顔立ちです。ひづめのついた足をしており、着ている物は厚くて黒い布でできた形のないローブだけです。
◆“闇に吠えるもの”、右のページに描かれているような、３本足の怪物の姿です。よく月に向かって吠えているのを目撃されますが、何のためにそんなことをするのかはわかっていません。
◆“闇の跳梁者”、黒い翼を持った巨大な怪物で、顔についているものと言えば、３つの部分に分かれた燃えるような目だけです。翼は酸性の液がしたたり落ちる巻きヒゲで縁どられています。危険で暴力的な怪物ですが、明るい光によって容易に追い払うことができます。
◆“ふくれ女”、体重300キログラム、身長が２メートルある生き物で、太った人間の女性にどことなく似ています。腕と鼻のあるべきところに、代わりに触手がついています。完全なキューピッドの弓の形をした口が５つついていますが、牙が束になって突き出しているので、見るも恐ろしい口元になっています。黄色と黒のまるで質のいい絹のように見える素材で作った長衣を着ていて、ベルトの所に６本の鎌(かま)と謎の“黒い扇”をぶら下げています。

もう１つの姿

これはあまり普通でない姿ですが、勇敢にもニャルラトテップと接触した相手がいた場合に、ニャルラトテップがその相手の体を所有して、このような姿で現れるのです。接触が終るとニャルラトテップは去り、犠牲者はふたたび自分の体をコントロールできるようになりますが、その体はそれ以後、このような怪物の姿に変わったままとなるのです。

図21.“闇のデーモン”

背丈の比較図

外なる神々の従者

“光焔からずっと遠ざかった片隅に、なにか形さだかならぬものがうずくまり、耳障りな横笛を吹いているのが見える。………汚臭を放つ漆黒の闇の中から、はたはたという鈍い怪音が聞こえてきた………火焔は熱を持たず、死と腐敗の冷たい湿気を発するのみだった。”

― H.P. ラヴクラフト
『祝祭』(定本ラヴクラフト全集第２巻より：並木二郎　訳)

Servitor OF THE OUTER GODS

触肢のついた肉の塊です。外なる神々の従者の姿は、蛙あるいはタコを思い出させます。この怪物はいつもある吹奏楽器(他にいい名前がないので、“横笛”と呼んでおきましょう)を持っていて、たいていの場合それを吹いています。

生息地：時空を超えたところ。普通はアザトースの玉座にはべっています。あるいは、特別にパワーの強い宇宙怪物が住んでいるところにいます。
分布：送り出されたところなら、どこにでも行きます。外なる神々の従者は過酷な条件に耐える力が非常に強い生き物で、気候・温度・気圧などの変動にはビクともしないようです。
生活と習慣：外なる神々の従者は普通、もっと大型の生き物に随行しています。しかし、時には自分だけで行動する場合もあります。誰かが教団を結成するのを手助けする場合があるのです。その教団はもちろん従者の主人であるらしい外なる神を礼拝するための教団です。
“主人であるらしい”と言ったわけは、この怪物は従者と呼ばれてはいますが、本当の意味で従者なのかどうかよくわかっていないからです。主人らしい大型の怪物と実際にはどういう関係にあるのか、はっきりしたことはわかっていません。この種族は他の生き物の家来というより、他の生き物に寄生あるいは共生しているのかも知れません(ダンシーズ、Dannseys,1978年)。もしそうだとすれば、この種族の持っている高い知性とオカルト志向によって、宿主である生き物の発展と礼拝を促進させるようになるのかも知れません。
　外なる神々の従者はオカルト術を行なうことに非常に長(た)けています。しかも肉体的に頑丈なので、この怪物を傷つけることは至難のわざです。従って、これを捕まえたい者は、ありとあらゆる場合にそなえて準備し、適切な道具あるいは武器を持ち、しかも１つ以上の逃げ道を用意しておく必要があるでしょう。

外なる神々の従者の見分け方――
◆　クトーニアンはもっとずっと大きいし、笛の音ではなく詠唱するような音と共にいます。
◆　クトゥルフおよびクトゥルフの落し子はもっとずっと大きいし、緑がかった色をしています。
◆　盲目のものは空を飛ぶことができるし、よく目に見えなくなります。
◆　ツァトゥグァの無形の落し子は黒い色をしています。
◆　ムーン＝ビーストは鼻づらの先についているピンクがかった触角以外には、触手を突き出すことはありません。
◆　ショゴスは絶え間なく泡立っていて、目その他の器官を形成したり、再形成したりを繰り返しています。

動き

　外なる神々の従者は普通、転がることによって前進します。下のスケッチ図は、怪物が触肢で地面をつかみ、体をそちらに引き寄せて転がりやすい形になり、それからゆっくりと転がる様子を示しています。

図22. 丸まって転がる外なる神々の従者

SERVITOR

シャンタク鳥

“それは地球やドリームランドで知られているような鳥やコウモリではなかった。それは象よりも大きく、………カーターは、それは悪い噂のシャンタク鳥だと確信し………翼には、奈落の底の霜と硝石がまだこびりついていた。”

— H.P. ラヴクラフト
『幻夢境カダスを求めて』(定本ラヴクラフト全集第４巻より：小林勇次　訳)

Shantak

シャンタク鳥はウロコのある巨大な怪物で、地球上でも知られている物質で出来ています。地球上の脊椎動物と、驚くほど似たところがあるのです。大きさは象のように巨大で、２枚の翼、ウロコのある外皮、２本の足を持っています。首は長く、尾も長いです。昔からシャンタク鳥は“馬の頭をもつ”と言われてきましたが、実際に頭蓋骨を見ると馬のようなプロポーションをしています。しかし、似ているところがあっても、その多くはただ偶然に似ているだけなのです。

シャンタク鳥の胸部は、エネルギーを通常時より余分に供給するための器官が大部分を占めています。戦闘にのぞむときに、翼の筋肉を強化するためです。この器官があるために、この怪物は容量の大きい重い体を空中に支えておくことができるのです。

上に述べたことは、ただ“普通のシャンタク鳥”の場合にだけあてはまることです。この他に、あまり知られてはいませんが、もっと小型のシャンタク鳥もいます。サイズはずっと小さくて、姿もかなり違います。外皮には羽毛が生えているし、前の翼には巨大なかぎ爪がついています。

どのシャンタク鳥も、夜のゴーントを見るとパニックに陥ってしまいます。多分、かつてシャンタク鳥と夜のゴーントは宇宙の同じ場所に住んでいたのではないでしょうか。それで、本能的にこんな風に反応するようになってしまったのです。シャンタク鳥が夜のゴーントを恐れなければならない理由など何もないからです。見たところでは、シャンタク鳥はどの夜のゴーントよりも大きくて強いのですから。

生息地：山岳地帯と砂漠の高台。シャンタク鳥は外宇宙を通ることができますが、外宇宙で長時間過ごすことはあまりありません。
分布：夜のゴーントやムーン・ビーストと同じように、シャンタク鳥もよくドリームランドにいます。それから、われわれの次元の遠く離れたどこかの世界にも住んでいます。
生活と習慣：シャンタク鳥は卵を産むことによって繁殖します。交尾したかしないかには関係なく、雄も雌も卵を産みます。民話によれば、雄のシャンタク鳥の卵には、特に興味ある性質があるそうですが、地球で見つかったことはありません。ミスカトニック大学の“中世形而上学部”では、雄のシャンタク鳥の卵の発見に対して大きな賞金をかけています。

シャンタク鳥のエサは、主として植物です。時には生き延びるために動物を食べることもありますが、動物は彼らの主要なエサではありません。

シャンタク鳥の見分け方——

- ◆　ビヤーキーはサイズがずっと小さいし、２本足ではなく４本足です。
- ◆　忌まわしき狩人には足が１本もなく、ヘビのようなシルエットをしています。

子供

卵がかえる日が近づくと、殻が透明に変わります。かえったヒナは親からあまりめんどうを見てもらえません。生まれて２、３週間で、もうすべて自分でやっていかなければなりません。

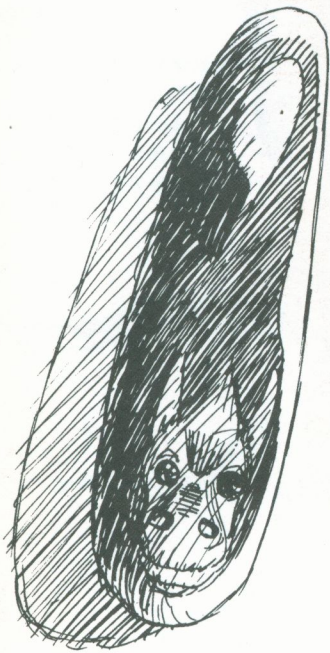



図23．雌のシャンタク鳥の卵

ショゴス

“……… この多細胞性不定型の細胞塊は、制御精神力の投射のもとであらゆる種類の形態を取り得……… それゆえに、各種の重労働を課するに適当な理想の奴隷になり得るものだった。これら、彼らの手になる不定型生命こそ、アブドゥル・アルハズレッドが、かの邪書『ネクロノミコン』の中で、〈ショゴス〉なる名で遠まわしに言及している存在に他なるまい。”

— H.P. ラヴクラフト

『狂気山脈』(定本ラヴクラフト全集第５巻より：高木国寿　訳)

背丈の比較図

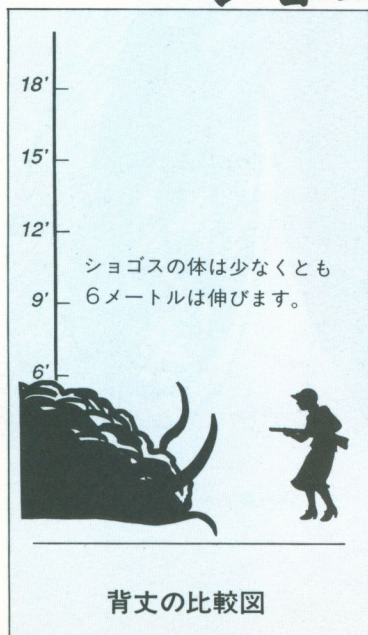
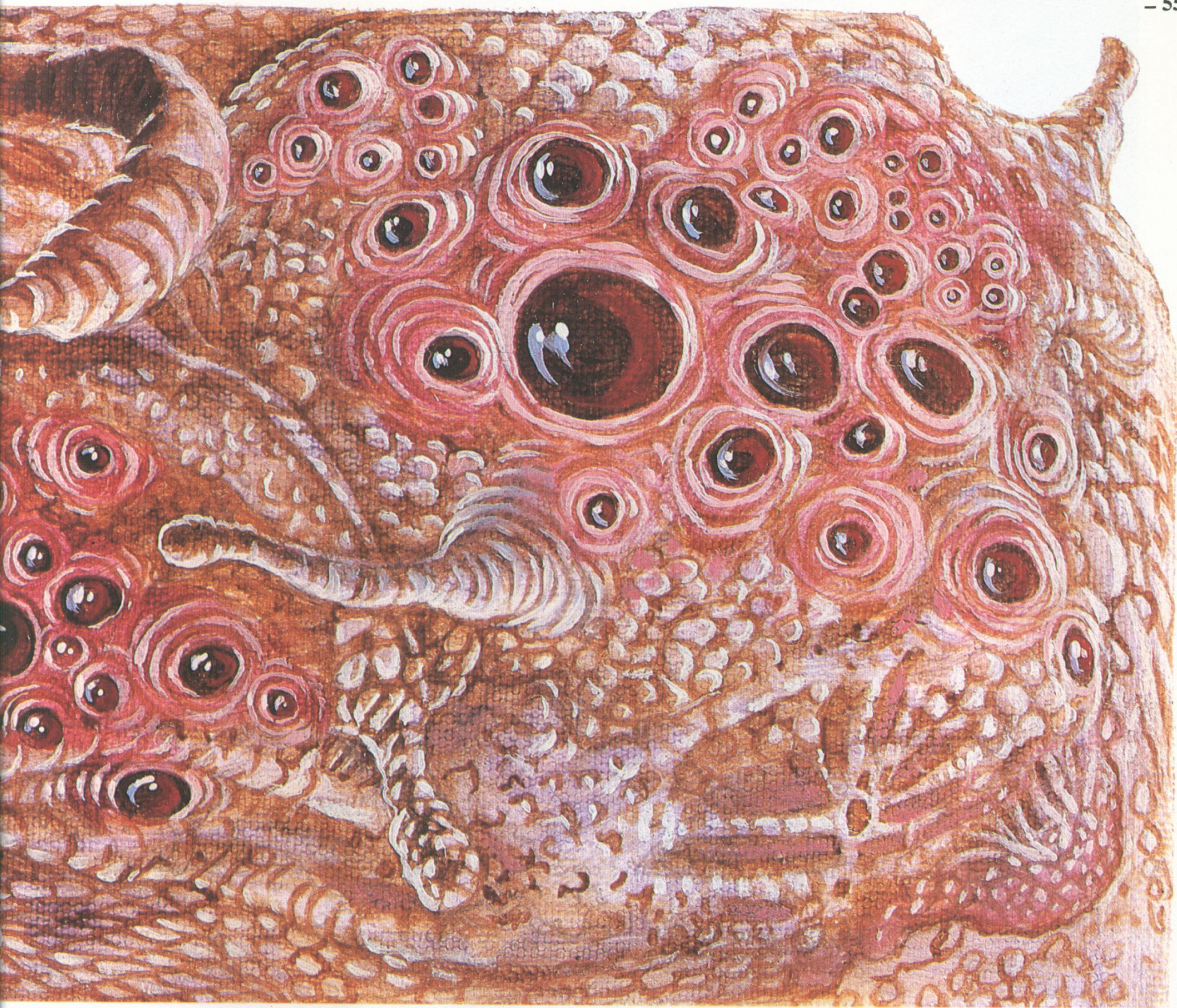
Shoggoth

ショゴスはずるずると這いまわる多細胞性不定型の巨大な怪物で、普通は黒い色をしています。この怪物は必要に応じて、体に臨時の目や発声器官その他の器官を作ったり、それをまた消滅させたりすることができます。意志伝達には口笛のような、また笛のような音を出します。以前の主人である古のものの話し方を真似ているのです。

催眠術のような術を使えば、ショゴスを隷属させることができます。術者の思うままに動かすことができるのです。ショゴス自身はそんな経験を決して喜んではいないようです。かつて古のものに対して大反逆をした事実を見ても、それがわかります。

ショゴスの攻撃方法は、敵を巻き込んで、吸い込むことによって相手をバラバラにしてしまうことです。その胸の悪くなるようなパワーと、どんなタイプの物理的攻撃もほとんど通じないということから、非常に恐れられている怪物です。

生息地：地球上では主として海中ですが、陸に住むこともできます。

分布：ショゴスは決してあちこちで見られるというような怪物ではありません(われわれに

とって、幸いなことです)。アブドゥル・アルハズラッド(正しくはアブド・アラズラッド)でさえ、その著『ネクロノミコン』の中で、地球上で見かけられたことはないと述べています。しかし、彼は間違っているようです。古のものが支配している、あるいはかつて支配したことのある惑星では、どこでもショゴスがいます。ショゴスは大変有益な奴隷として使えるからです。古のもの以外でも、知性のある生き物ならショゴスにそういう価値があることを知っているはずです。

生活と習慣：ショゴスの繁殖方法は、芽を出して増えていくという方法です。エサにするのは、有機物ならどんな物でもかまいません。吸収したり、巻き込んだりして栄養にしてしまいます。ショゴスはどんな所でも生きていけますが、地球の上では、主として深い海の中だけに住んでいます。そこで深きものに飼い慣らされたのも2、3匹います。くわしいことはわかりませんが、深きものは人類に刃向かう計画のためにショゴスを飼い慣らしたようです。

ショゴスは非常にタフな生き物です。寒さに対して抵抗力があるし、ハリウッド映画のフィクションの動物の多くのように、火を恐れるということもありません。火によって焼けるということがないのです。戦闘的なショゴスに対処するには、やみくもにぶつかって行く他はありません。

ショゴスの見分け方——

◆　アザトースは体に目その他の器官を形成させたりしません。
◆　盲目のものは空を飛ぶし、よく目に見えなくなります。
◆　ツァトゥグアの無形の落し子は、色が真っ黒です。それに、脊椎動物の特徴に似た器官、例えば、頭とか足などを体の1部で形成します。

水に浮かぶショゴス

ショゴスは自然に直径5メートルくらいの球形になります。

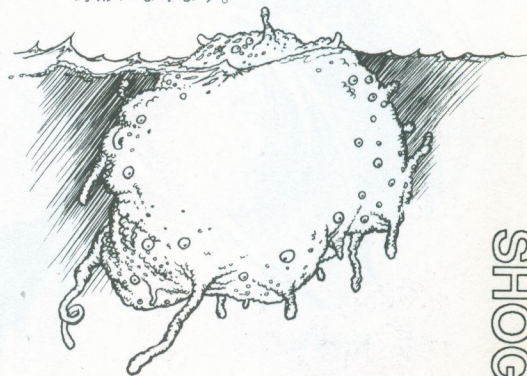
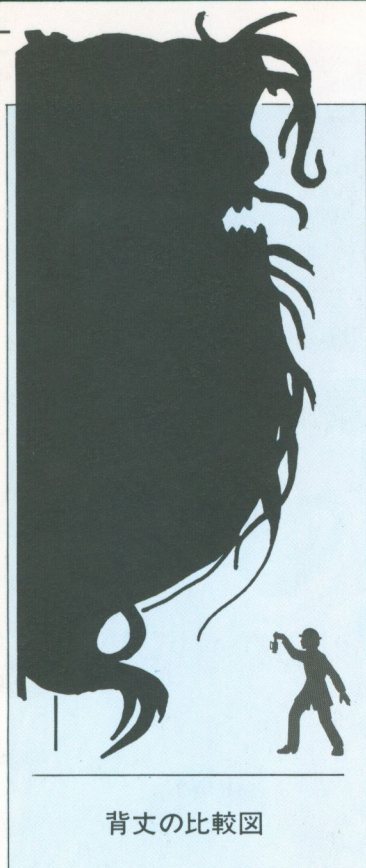



図24. 水の中のショゴス

背丈の比較図

シュブ=ニグラス

“邪悪は………潜み、支配する敵として、どこにでも現れる。………［そして見える世界は］無限の悲劇と悲しみの舞台である。舞台には、見えざる半存在の力が執拗に漂い、優位を得ようと懸命に戦っている。無益に自分を欺くばかりの、不運な人間どもの運命が、そうやって決められていくのだ。”

— H.P. ラヴクラフト

Shub-Niggurath

シュブ=ニグラスはニャルラトテップ、ヨグ=ソトース、アザトースなどと同じく、‘外なる神’の1種で、よく‘千匹の仔をはらみし森の黒山羊’と言うタイトルで呼ばれます。シュブ=ニグラスというのは雌なのだと言われることもありますが、こういう怪物に関しては、性別などは多分意味のないことでしょう。

この巨大な雲のようなかたまりは、グルグルとかき混ざり、膿みただれます。そしてその霞のようなかたまりの1部が細長い触手になったり、粘液のしたたるいくつもの口になったり、蹄のついたのたうつ足になったりします。

シュブ=ニグラスの子供というのが、当ハンドブックの前の方に出てくる悪名高い黒い仔山羊です。産みたいときにいつでも好き勝手に、無計画にどんどん黒い仔山羊を産みます。

シュブ=ニグラスは、黒い仔山羊以外の他の生き物をも産むことが知られています。普通は、他の外なる神や小型の生き物と接合した後に、その仔を産むのです。そうやって出来た子供がイギリスにいます。ゴーツウッド(山羊の森)という名の小さな村で、そういう子供を礼拝していることが知られています。礼拝している住民たちは、不死の命を与えられていると言われています。

生息地：シュブ=ニグラスは自分が行きたい所ならどんな所でも、どんな時にでも現れます。あるいは、超幾何学によって召喚された所に現れます。

分布：外なる神はすべてそうですが、シュブ=ニグラスも時間と空間の両方を横切ることができます。したがって、いろいろな場所に同時に姿を現すことができます。宇宙の中心地にいることが多いようです。多分、アザトースの前でゆっくりとのたくるように踊っている巨大怪物の中の1匹として、そこにいるのでしょう。

生活と習慣：シュブ=ニグラスは雌であるとよく言われますが、それは嫌らしいほどの多産であること、グロテスクな仔を次々と、いとも簡単に産み出すことからそう言われているのです。この怪物は、少なくとも地球上では、エサを食って仔を産む以外に、特に目的と言えるものは何も持っていないようです。

しかし、外なる神の1員であり、豊富な生産者であるシュブ=ニグラスは、我々が考える以上に重要な怪物なのかも知れません。少なくとも1人の探索者(クワイアーズ、Choirs ,1986年)は、この怪物と、我々の銀河系内で目につく何種類かの無定型生物とを関連づけています。

シュブ=ニグラスの見分け方——

◆　アザトースには、目に見える口はありません。

◆　黒い仔山羊はもっとずっと小さいし、はっきりとした形があります。

◆　ヨグ=ソトースはバラバラに分かれた泡の姿をしていて、このように1つの無定型の塊ではありません。

発芽

シュブ=ニグラスの横の方からふくらみ出している芽に注目してください。芽が熟すと、本体から離れて落ちます。芽が最終的にどんな形になるのか、どんな働きをするのかは、推測するしかありません。

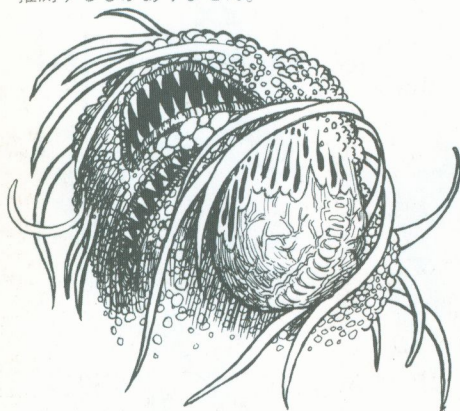
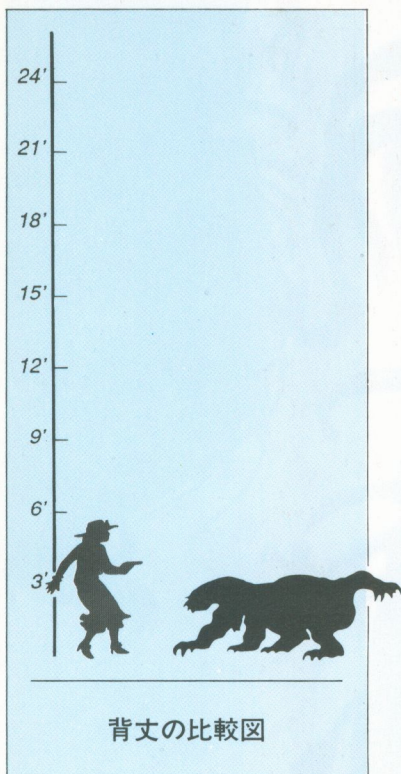



図25、仔の証拠

SHUB-NIGGURATH

星の精

“それが真の恐怖小説かどうかを確かめる方法は一つしかない——即ち、読者に深い恐怖感を与えるかどうか、未知の世・未知の力と接触したという感覚を与えるかどうかを確かめるしかない。真黒い鳥の羽撃きとか宇宙の最果てに棲む得体の知れぬ怪物の引っ掻く爪の音でも聞いているかのように、読者が畏怖の念を抱きつつじっと聞き入っている様子をしているかどうか。”

— H.P. ラヴクラフト

『文学と超自然的恐怖』(定本ラヴクラフト全集第7-I巻より：植松靖夫　訳)

Star Vampire

星の精は普通、我々の目には見えません。ときどき、びっくりするようなゲタゲタ笑いやグロテスクなクスクス笑いの声をたてます。エサを体に取り入れるとすぐに、姿が見えるようになります。体の色は、エサとして吸収した液体の色です。不透明な物質をスプレーで吹きつけるか、振りかけるかすると、怪物の姿をもっと長い間、可視状態にしておくことができます(ブレイク、Blake,1935年)。

星の精のエサは液体だけです。液体を吸い取る口と猛鳥のような爪で、犠牲者の胸を裂き、中の体液をすすります。

この怪物は空を飛びますが、どんな方法で前進するのかは目に見えません。この怪物の体は、地球上にある物質ではできていませんから、大気中や宇宙空間でも浮いていることができるのでしょう。

生息地：外宇宙。この怪物は星々の間に住んでいるようです。エサを補給するためとか、あるいは、何かテレパシー風のテクニックで召喚された場合に、惑星の表面にやって来ます(ブレイク、Blake,1935年)。

分布：我々の銀河系の中の至るところにいます。

生活と習慣：星の精の体の内部構造は異様で、荒いツブツブで出来ています。星間生物としては変わっていることに、複合有機液体(たとえば血液)だけをエサにしています。ほとんど人間に近いくらいの知性がありますが、工芸品を作ったりすることはしません。また、社会生活をするのかしないのか、あるいはどうやって繁殖するのかということはわかっていません。

体の表面にあるたくさんの穴や、歯のついている小さな吸い込み口や、別についている吸引胃で、液体のエサを消化します。すると液体は怪物の体と同化され、一時的に体が可視状態になります。液体が代謝されて、怪物の姿がふたたび透明になるまでの時間は、エサの種類や量によっていろいろですが、ほ乳動物の血の場合は1分以下です(フォールワース、Fallworth,1936年)。

星の精が普段住んでいる所から太陽系内にあるエサの所までの広大な距離を、どうやって旅行して来るのかはわかっていません。結果から判断して、次元下にあるトンネルを通るのだという説もあります(ダンシーズ、Dannseys,1988年)。フーンをもっているという証拠は発見されていません(ラッツエッグ、Ratsegg,1988年)が、フーンによって飛行しているのではないかと推測される点はないわけではありません。

星の精は他の似たような怪物と同じように、普段住んでいる所にいるときの生態を研究されたことはありません。太陽系の外を研究する適切な設備がないからです。

星の精の見分け方——

- 盲目のものは、クスクス笑いではなく、口笛のような金切り声を発します。
- ユゴスよりのものは常に目に見えています。

消化器官

消化孔の断面図です。中側がギザギザした筋肉質の吻と、体の表面のすぐ下にある吸引胃が示されています。歯は犠牲者の胸部に突き立ててくい込むために使われます。吸引胃から枝分かれして出ている管は、エサの液体を星の精の体中に送るためのものです。吸引胃の底の所にあるコイル状の腺の働きはわかっていませんが、多分、消化酵素か保護液か何かを分泌する腺でしょう。

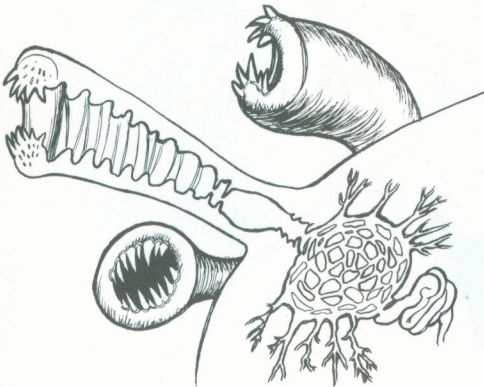
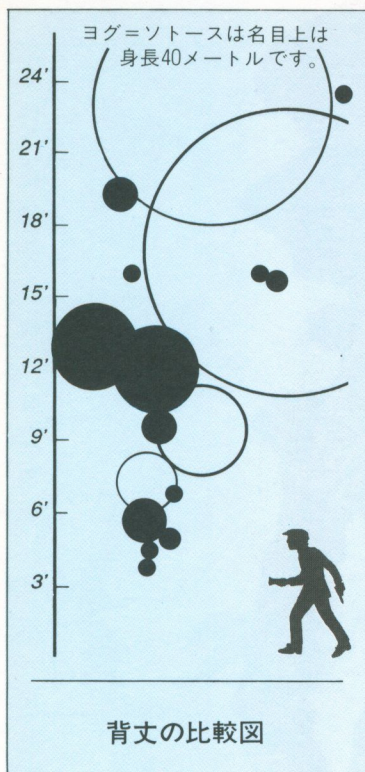



図26. 消化器官の断面図

背丈の比較図

ヨグ=ソトース

"古きものはかつて存在したし、現在も存在するし、また未来にも存在するであろう。人知のおよぶ時間と空間にではなく、時間と空間の狭間にあって、古きものは悠々と源初のものとして次元を超越し人の眼に触れることなく歩んでいる。ヨグ=ソトースはそこに至る門を知っている。ヨグ=ソトースこそが門である。ヨグ=ソトースはその門を開ける鍵であり門の守護者である。ヨグ=ソトースにあっては、過去も現在も未来もすべて一つのものである。彼は古きものがその昔どこに現れ出たかを知っているし、古きものが将来どこに現れ出るかも知っている。彼は古きものがかつてこの地上のどこを闊歩したか、また今なおどこを闊歩しているか、そして古きものが闊歩しているにもかかわらず、何故に誰の目にも見えないのかを知っている。……… 汝は悪臭を放つものとしてのみ古きものを知るであろう。かの者どもの手が喉元にあっても、汝にはその姿が見えないであろう。古きものの棲まう所は、汝の防御をかためた戸口と軒を並べることすらある。"

— H.P. ラヴクラフト
『ダンウィッチの怪』(定本ラヴクラフト全集第4巻より：鈴木克昌 訳)

Yog-Sothoth

ヨグ=ソトースという名で知られている宇宙生物は、我々の次元に現れるときには、玉虫色のたくさんの球の集合体の姿をしています。球は絶え間なく動き、再編成したり、形を変えたり、分かれて別の球になったり、また合体したりを繰り返しています。球は常にくっつき合っているとは限らず、ときには、相当広い範囲に散っていることもあります。

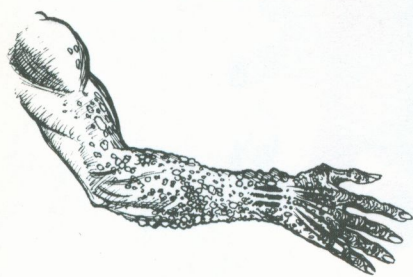
単純な装備しかしていない探索者でも、ヨグ=ソトースと接触することができます。しかし、この怪物は大変危険ですから、専門家でない者は接触を避けるべきでしょう。ヨグ=ソトースと長い間接触したり、強い意志のもとで接触しなかったりした者がいたために、その土地の時空の連続体にゆがみが出来てしまったこともあります(フォールワース、Fallworth,1928年)。

ヨグ=ソトースは謎の旧支配者の中の1種です。幸いなことに、旧支配者と人類との接触は、最近ではほとんどありません。ヨグ=ソトースが旧支配者の中の代表的な種類なのかどうかはわかっていません。わずかしかない資料ではありますが、資料が示すところでは、我々はどんな旧支配者とも接触は絶対にしない方がいいようです(マストール、Mustoll,1984年、1987年を参照)。

生息地：ヨグ=ソトースは主としていろいろな次元の隙間に住んでいるので、すべての時、すべての場所に隣接しています。
分布：我々の宇宙内のどんな所でも遭遇することができます。
生活と習慣：古代の書物にも、ヨグ=ソトースは"道を開くもの"として、あるいは奇妙な知恵を授ける者として記述があります。ヨグ=ソトースのこの特性はハッチンソン(Hutshinson,1864年)によって確認されました。今でも形而上学者たちは、星間生物や星間の次元を捜索するのに、ヨグ=ソトースを重要な媒介としています。これ以外に媒介となるものがないからです。

現在のところ、ヨグ=ソトースおよび他の旧支配者に関する我々の知識はあまりにも少ないため、この怪物の起源、パワー、等級、意味などに関する印刷されている情報などを見ても、かえって混乱するだけでしょう。

ヨグ=ソトースの見分け方——
◆　シュブ=ニグラスは漠然とした塊であって、はっきりした球体の集合体ではありません。

図27. 壊れた組織の例

ヨグ=ソトースに触れた場合

ヨグ=ソトースを形づくっている物質が、この男の腕にひどいダメージを与えました。普通ヨグ=ソトースに触れると、火ぶくれ、組織の乾燥、骨の露出という結果になります。

YOG-SOTHOTH

ツァトゥグァの無形の落し子
夜のゴーント
空鬼
星の精
古のもの
ガスト
外なる神々の従者
クトゥルフの落とし子(シルエット)
ニャルラトテップ
ティンダロスの猟犬
アザトース,初期段階
偉大なる種族
忌まわしき狩人
ショゴス
グール
クトーニアン

シャンタク鳥
盲目のもの
ビヤーキー
ユゴスよりのもの
シュブ=ニグラス
Relative Sizes
ヨグ=ソトース
この縮尺であと50センチ分伸びます。
ムーン・ビースト
黒い仔山羊
深きもの
イタクァ
ピーターセン／サリヴァン／ウィリス
ドール
あと３メートル伸びます。

推薦書籍

国書刊行会

『定本ラヴクラフト全集』1～10
『ク・リトル・リトル神話集』
『真ク・リトル・リトル神話大系』1～10
ウィアードテールズ1～5

アーカム・ハウス

Lovecraft, H.P. 1963. The Dunwich Horror and Others. Corrected 6th printing.
—.1964. At the Mountains of Madness and Other Novels. Corrected 5th printing.
—.1965. Dagon and Other Macabre Tales. Corrected 5th printing.
—.1970. The Horror in the Museum and Other Revisions.
—and Derleth, Augast. 1974. The Watchers Out of Time and Others.

ホビージャパン

Petersen, Sandy. 1986. “クトゥルフの呼び声 3rd Ed.”：H.P. ラヴクラフト世界のファンタジー・ロールプレイングゲーム。Lynn Willis, ed.
“クトゥルフの呼び声”のためのゲーム・サプリメント：
Barton, W.A. 1986. “クトゥルフ・バイ・ガスライト” S.Petersen and L.Willis, eds.
Herber, K. 1987. “ユゴスよりの侵略” S.Petersen ed.
Petersen, S. and Willis, L., eds. 1982 “ヨグ＝ソトースの影”
Petersen, S. and Willis, L., eds. 1983 “療養所の悪魔”
Petersen, S. and Willis, L., eds. 1985 “クトゥルフ・コンパニオン”
Rahman, G. 1985 “ウェンディゴへの挑戦” L.Willis, ed.
有坂　純 1988 “黄昏の天使”

ケイオシアム

Barton, W.A.；Hamblin, W；& Hargrave, D. 1984. Curse of Cthonians. Sandy Petersen, ed.
Costello, M.J., with Willis, L. 1985. Alone Against the Dark.
DiTillio, L., with Willis, L. 1984. Masks of Nyarlathotep.
Herber, K. 1984. Trail of Tsathogghua[sic]. S. Petersen, ed.
——. 1986. Spawn of Azathoth. L.Willis and S. Petersen, eds.
Petersen, S., and Kahn, S., eds. 1986. Terror From the Stars.
Petersen, S., and Willis, L., eds. 1987. Terror Australis.
Petersen, S., and Willis, L., eds. 1988. Cthulhu Now！
Petersen, S.；Robson, K.L.；Herber, K.；and others. 1986. H.P. Lovecraft's Dreamlands. L.Willis, ed.

他の出版社

Barlowe, Wayne Douglas, and Summers, Ian. 1979. Barlowe's Guide To Extra-Terrestrials. First edition. New York：Houghton Mifflin.
Cottam, Seth Jowell. 1967. A Conjectural Grammar. New York：Houghton Mifflin.
Genn, Harlan M. 1986. Investigators of the Beyond. New York：Random House.
Nobles, Samantha. 1983. Adventures in the Field. New York：Crowell Publishers.
Treer, Tamlan. 1984. A Preternatural Bestiary. 6 vols. New York：Harper & Row.

参考文献

フォールワース記念文集―イジンウィル, L.N. 編. 最近の探索：E.C.フォールワース記念文集：学問の50年. アーカム, マサチューセッツ：ミスカトニック大学出版局, 1987.
ビリングトン, A.P. 1945. “アザトースの実体化における成長率の遅延と経時変化” 中世形而上学会報38：314-336.
ブレイク, R. 1935. “不可視性の7つの解決” 超形而上学会報 33：111-143.
クワイアーズ, アンヌ スコア .1978. “人口II惑星に共通な擬プラズマ的超存在に関する調査” 超形而上学会報 84：334-380.
ダンシーズ, ピーター. 1971. “月の写真記録に見られる奇妙な不規則性について” 修士論文, プロヴォ州立大学.
―. 1978. “『従者』の行動の解剖学的再評価” 中世形而上学会報 71：280-311.
―. 1981. “幻夢郷の次元間通路を通してのドールの分散” インズマス協会年間 114：114-131.
―. 1983. “占星術とアザトース” 北アメリカ占星術協会雑誌 14：27-31.
―. 1986. 食屍鬼の自然史. ニューヨーク：ハーヴァード大学出版会.
―. 1987. “通称『忌まわしき狩人』の超地理学的原理概説” フォールワース記念文集, 189-207.
―. 1987. “ン＝カイ発掘からの調査結果中間報告” アーカム生物理研究所年次報告, 40：21-25.
―. 1988. “対称重力子の抑制効果追跡” インズマス協会年間 121：44-46.
デールット. 1959. “破壊された部屋：亜人類の寿命と遺伝学的再吸収” インズマス協会年間92：257-289.
フォールワース, E.C. 1922. ムーンビースト：幻夢郷の商人, プロヴィデンス, ロードアイランド州：ブラウン大学出版会.
―. 1927. フィフィ：食屍鬼の矯正. アーカム, マサチューセッツ州：ミスカトニック大学出版会.
―. 1928. ウィルバー ウェイトリー小伝, 1913-1928. アーカム, マサチューセッツ州：ミスカトニック大学出版会.
―. 1936. “星間物質による栄養摂取と不透明性” 中世形而上学会報 29：38-44.
ギルマン, W. デューイン. 1984. “合衆国北東部における食屍鬼の繁殖” 国際形而上学会雑誌 42：41-59.
―. 1986. “反光電池と『太陽監察官』問題” 国際形而上学会雑誌 44：220-281.
ハイク, ハーバート. 1983. 予備的セラエノ・カタログ. アン・アーバー, ミシガン州：ミシガン大学出版会.
―. 1983. “新ティンダロスの猟犬年表” 超形而上学会報 81：22-48.
ハッチンソン, エドワード. 1864. 路を開くもの. リヴァプール, イギリス：ブズラエル出版.
イジンウィル, L.N. 1981. “新家系図：黒き仔山羊と人類の夢” 中世形而上学会報 74：55-89.
―. 1985. “ギャー・ヨスンにおける外皮の不調和” 空想的動物図鑑 91：41-43.
―. 1986. “地上における黒き仔山羊の事件の記録” 国際形而上学会雑誌 44：180-219.
―. 1987. “41人の怪事件の探索者の認知” フォールワース記念文集, 122-143.
―. 1987. 森の影：シュブ＝ニグラスの黒き仔山羊の記録と自然史. ニューヨーク：オクスフォード大学出版会.
キルトン, デーナ C. 1979 “幻夢郷に南の端はあるか？” 超形而上学会報77：104-141. 256ページ以降に地図
ラーカン, エリック K. 1985. “N次元存在マトリクス展開定理” 未出版. ヒストス数学グループに提出された文書, ミスカトニック大学, 4月11日.
マーシュ, S. ロバート. 1980. “クトーニアンの卵と幼生の成長” インズマス協会年間 113：7-89.
モリアーティ, ジェイムズ. 1872. 小惑星の運動力学. 出版社名、場所不明.
マストール, イヴァン. 1984. “ヨグ＝ソトースの憑衣中の応急処置” インズマス協会年間 82：317-324.
―. 1985. “ギャー・ヨスンの分散した筋肉と神経の分析” 類型学会報 5：34-47.
―. 1987. “木星の小衛星への『通路と門』” フォールワース記念文集, 150-156.
ピースリー, ウィンゲート. 1936. 超次元の影. フィラデルフィア, ペンシルヴァニア：ゴールデン・ゴブリン出版.
ラッツエッグ, F. フォード. 1988. “アルファ・ケンタウリ以遠の星系の探査” NASAの記録 88.3.21/889912. 未出版.
ヴァースン, マイクル. 1988. “星間ネットワークか？ 新発見の非対称ヒルベルト空間” 天文写真ニューズ, 10月17日号, 11-14.
ウォズリング, ノア .1982. “ティンダロスの猟犬撃退法” 国際形而上学会雑誌 40：101-110.
―. 1984. “無形の落とし子の外皮についての予備調査” 季刊ダンウィッチの息子 160：21-38.
ウィルバム, イアン・ミル .1988. “空鬼の年別出現記録 1970-1985” 空想的動物図鑑 94：8-14.

クトゥルフモンスターガイド

著者　サンディ・ピーターセン
訳者　中山てい子
1989年 3月15日 初版発行

編集人　武田敏裕
発行人　佐藤光市
発行所　株式会社ホビージャパン

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-26-5
TEL：(03)354-9341　振替：106531
写植・製版　山田写真製版所
印刷所　三共グラビヤ株式会社
製本所　株式会社丸山製本所

ISBN4-938461-45-5 C0076 ¥1600E

本書のラヴクラフトの著作からの引用は参考文献にあげた国書刊行会の刊行物によりました。

S. PETERSEN' S FIELD GUIDE TO

CTHULHU MONSTERS

A Field Observer's Handbook of Preternatural Entities

定価1,600円
ISBN4-938461-45-5 C0076 ¥1600E

SELECTED PRONUNCIATIONS

Azathoth	Az-uh-thoth
Byakhee	B'YAHK-hee
Chthonian	kuh-THOEN-ee-un
Cthulhu	Kuh-THOO-loo
Dhole	DOEL
Ithaqua	ITH-uh-kwah
Nyarlathotep	NIE-ar-LATH-oe-tep
Shantak	SHAN-tak
Shoggoth	SHOW-goth
Shub-Niggurath	SHUB-NIG-ger-ath
Tindalos	TIN-dahl-ose
Yog-Sothoth	YAHG-SOE-thoth

S. PETERSEN'S FIELD GUIDE TO

CTHULHU MONSTERS

A Field Observer's Handbook of Preternatural Entities

S. PETERSEN' S FIELD GUIDE TO

CTHULHU MONSTERS

A Field Observer's Handbook of Preternatural Entities

Hobby JAPAN
定価1,600円
ISBN4-938461-45-5 C0076 ¥1600E